

第IV章 蓼島遺跡

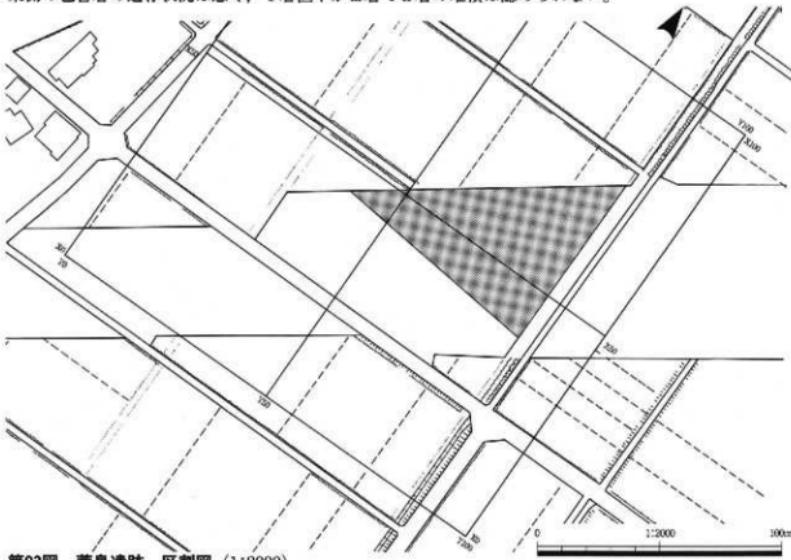
1 遺跡の概要

A 概 要

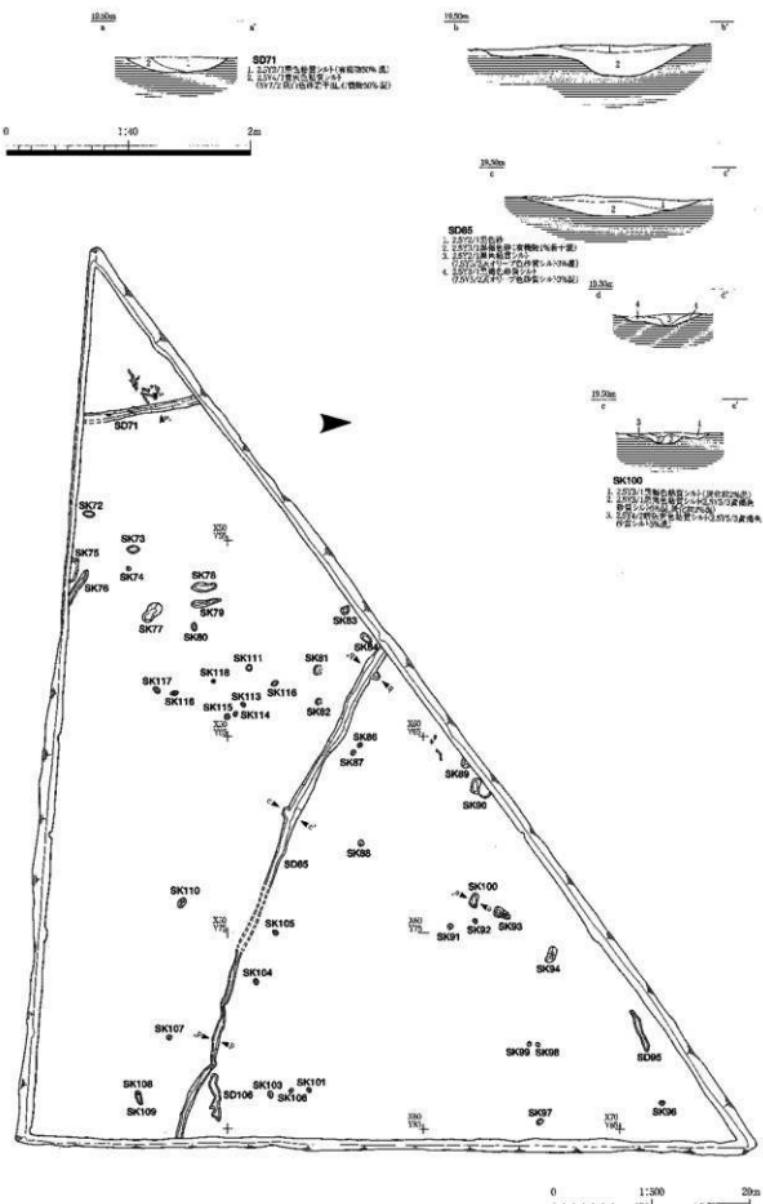
蓼島遺跡では、縄文時代晚期・弥生時代後期～古墳時代前期・近世以降の遺構が検出面を越えてみつかっている。しかし、遺構の数・遺物量は稀薄で、試掘調査所見の予測通りに遺跡の本体からややはざれないと推察される。各時代の遺構は溝または自然流路と穴のみで、人工的に掘削されたとみられる遺構は近世以降の溝以外はほとんど検出されなかった。

B 基本層序

基本層序は I a 層：褐灰色シルト（耕作土），I b 層：暗灰黄色砂質シルト（床土），I c 層：褐灰色粘質シルト（近世以降遺物包含層），II a 層：黄灰色粘質シルト（弥生時代後期から古墳時代前期遺物包含層），II b 層：浅黄色粘質シルト（同），III a 層：褐灰色粘質シルト（漸移層），III b 層：黒褐色粘質シルト（縄文時代遺物包含層），III c 層：暗灰黄色粘質シルト（漸移層），IV 層：灰白色粘質シルト（縄文時代遺構検出面）である。IV 層の約20cm下層は疊層で、IV 層が薄い地点では特に湧水点が高いためか、非常に排水の悪い地盤であった。各時期の遺構は II 層上面，III 层上面，IV 层上面で検出しているが、調査区壁面の観察からは縄文時代の遺構は III c 層上面から掘り込んでいることがわかる。地形は北東西方向に向かって緩やかに傾斜しており、III 層の堆積も西端では約40cmと厚いが、東側では15cm～20cmと薄くなっている。また、調査区東側に沿って用水が流れしており、その改修時の影響か東側の包含層の遺存状況は悪く、I 層直下が III 層で II 層の堆積は認められない。



第93図 蓼島遺跡 区割図 (1:2000)



第94図 萩島遺跡 造構実測図
SD71・SD85・SK100

2 遺構・遺物

遺構・遺物量は前述のとおり非常に少ないが、時期別に以下記述していく。

A 繩文時代

縄文時代の検出面であるIV層上面においては48の土坑状・溝状の遺構を検出したが、自然流路2条と土坑1基以外は性格のわからないものがほとんどである。

71号流路（S D71, 第94図）

S D71は調査区南西端で検出した流路で、幅97cm、深さ12cmで、南から北に向かって流れる。埋土には植物が腐食した有機物が50%以上含まれており、埋土や周辺からはクルミが出上している。埋土の様子から時間をかけて埋まっていった自然流路と推察される。遺物の出土はない。

85号流路（S D85, 第94図）

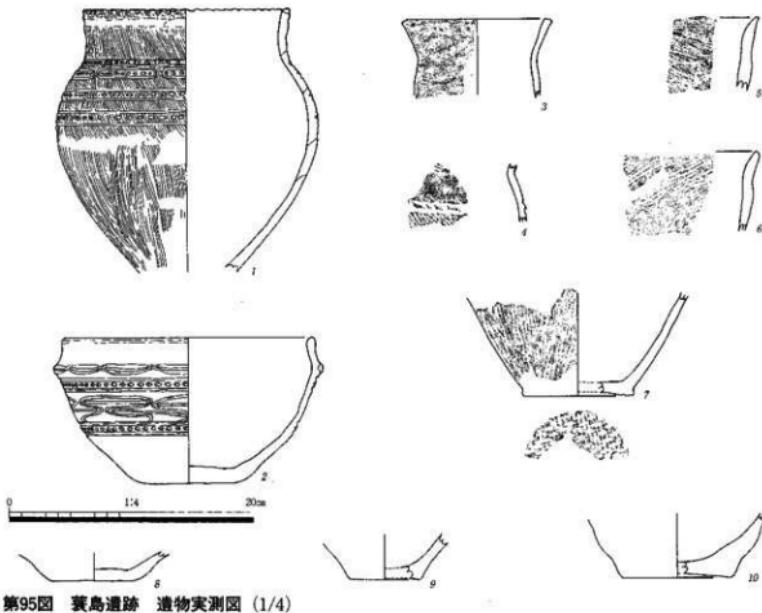
調査区中央を東から西に向かって流れている自然流路。幅約2m、深さ24cmで、砂質の黒色土が堆積する。埋土から縄文土器片が出土した唯一の遺構である。

100号土坑（S K100, 第94図）

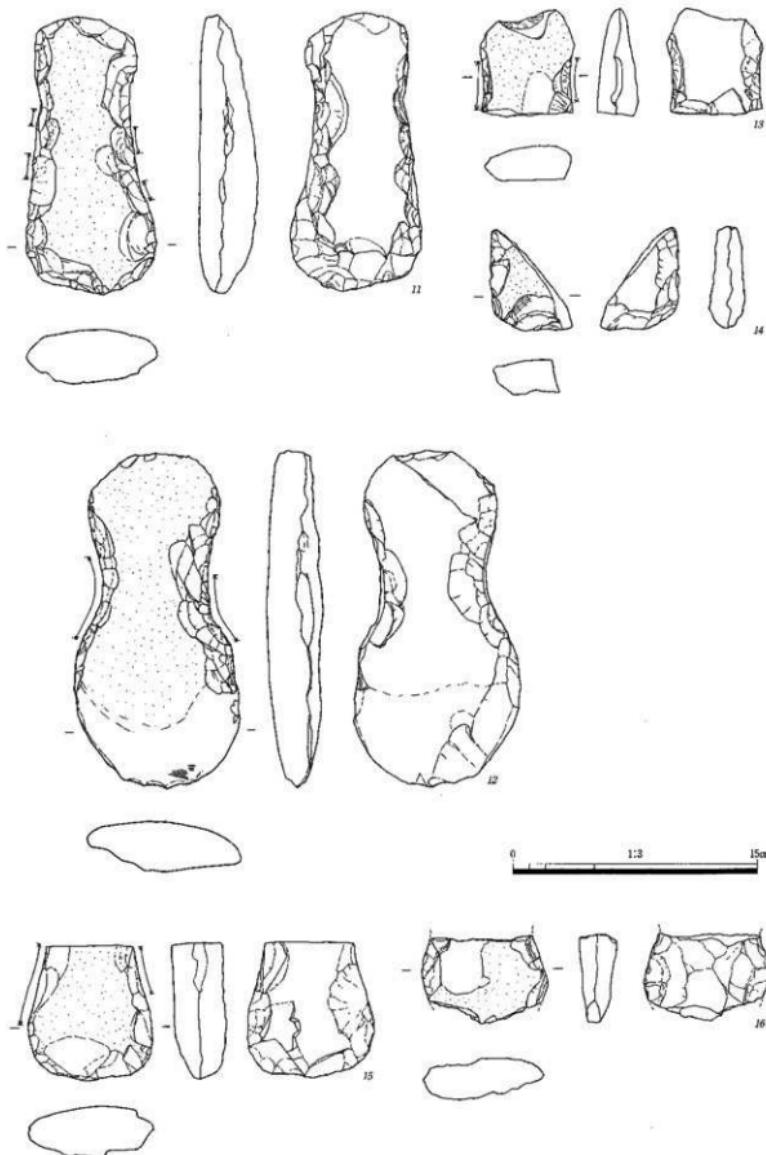
調査区北寄りで見つかった長方形の土坑。長辺約1.5m、短辺約0.8mで、深さは8cmと浅い。埋土に炭化粒が混じることや、上面から縄文土器がある程度まとまって出土したことから、当該期の遺構と関連するものと考えられるが、埋土内からは遺物は出土していない。

包含層の出土遺物（第95~98・100図、図版56・60~62）

縄文時代の遺跡としては包含層からも決して多くの遺物は出土していない。図化することができたのは縄文土器が10点、石器が9点のみである。



第95図 貝島遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層

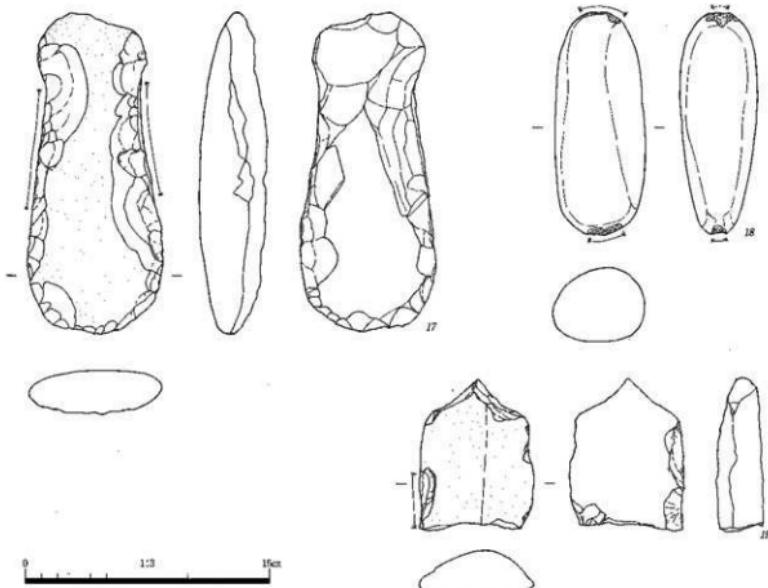


第96図 萩島遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層

縄文土器には深鉢と浅鉢がある。深鉢には、口縁部が外反し胴部中位が膨らむ器形で、外面に沈線文などを施すもの（1・4）と、胴部が外傾し、口縁部が直立もしくはやや外傾する器形で、器面には条痕文を施すもの（3・5～7）がある。1は、口唇部に外側から二枚貝の表面を等間隔に押しつけて装飾し、胴部外面全体には縱方向の条痕文を施している。口縁部直下には浅い凹線を巡らせ、胴部中位上半には棒状具による沈線文で区画した内部に列点文が施されている。晩期後葉の下野式土器の特徴をもつ。4は胴部中位の破片で、中央に平行沈線を引き、その間をヘラ状のもので押し引く。その上部は研磨され、下部にはR Lの單節の細い縄文が施されるもので、晩期中葉の中屋式に比定される。3は口縁部が外反する小型の深鉢で、灰褐色を呈し、外面は一度引かれた条痕がナデ消されており、内面には横方向の条痕が残る。内面には炭化物の付着が認められる。5は先細りの口縁部をもつもので、外面には斜位の条痕が施される。6の内面には砂粒の動きが明瞭に観察される。7の外傾する胴部外面には縦位の条痕文が施され、底部には網代痕が残る。9・10は無文の深鉢の底部。

浅鉢は全形を知り得るものは1点のみである。2は直立する口縁部をもち、胴部中位に眼鏡状隆帯・工字文風の沈線文・列点文を施すもので、大洞A式の特徴をもつ。全体に破片が脆くなってしまっており、表面が赤色に変質していることから二次焼成を受けていると考えられる。8は浅鉢の底部で、外面は無文である。土器は総じて縄文時代晩期中葉から後葉の特徴をもっている。

石器は打製石斧と叩石がある。打製石斧は破片も合わせて14点出土している。石材は砂岩・凝灰岩などの横長裂片を加工して作成しており、形態は大別して短冊形と分銅形に分けられる。12は分銅形を呈し、刃部に直線状の使用痕・擦痕が認められ、先端は摩耗によって丸みを帯びている。18は1点のみ出土した叩石で、石材は閃綠岩、上下端に浅い敲打痕が認められる。



第97図 菊島遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層

B 弥生時代～古墳時代

Ⅲ層上面において、灰黄色粘質シルト等のⅡ層を主体とした埋土をもつ自然流路を検出した。大きく分けて西端のS D51と、中央部のS D55周辺の一群に分けられる。

51号溝（S D51, 第99図）

調査区西端で検出した南から北に流れる流路。幅90cm, 深さ20cmで埋土下層には有機物が多く混じる。

55号溝（S D55, 第99図, 図版55）

調査区中央を流れる主流をなす流路で、ここからS D52・S D57・S D58・S D59が支流として分岐する。埋土は黄灰色の粘質土と砂が互層となり、他の土の混入がみられないことから、短期間の急激な流れによる水性堆積によるものと考えている。埋土からの遺物の出土はないが、造構上面及び周辺からは弥生時代終末期から古墳時代前期の弥生土器・土師器が出土している。

包含層の出土遺物（第98図, 図版56）

20~22は弥生土器の壺の口縁部小破片である。口縁部の形態は無文の有段口縁のもの、「く」の字口縁のもの、口縁端部が受け口状を呈するものがある。弥生時代終末期の特徴をもつ。23は直口壺。

口縁部内外面は横方向のヘラミガキ、球脛を呈する部体は外面が

ヘラミガキ、内面がハケ調整後ナデ調整したものである。古墳時代前期の特徴をもつ。

C 近世以降

検出した遺構は、溝及び溝状の造構が34条・土坑3基である。このうち、I c層を主体とするややしまった灰色シルトを埋土とする溝群と有機物を多く含んだ埋土をもつ自然流路の一群に大きく分かれる。前者は17世紀から近現代に下るものである。

2号溝（S D2, 第99・100図, 図版58）

調査区中央で検出した弓形状の短い溝。堅くしまった黄灰色シルトが堆積する。遺物は越中瀬戸(24)・板状木製品が出土する。24は鉄釉の皿で、内面に釉止めの段が巡る17世紀前半頃のもの。

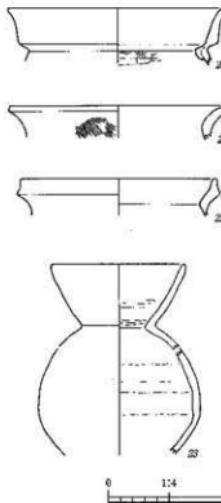
35号溝（S D35, 第99図）

調査区西側で検出した南西から北東へ流れる流路。埋土は上層に黒褐色粘質シルト、下層に有機物が20%以上混じる暗褐色粘質シルトが堆積しており、澱んだ流れであったことが推察される。

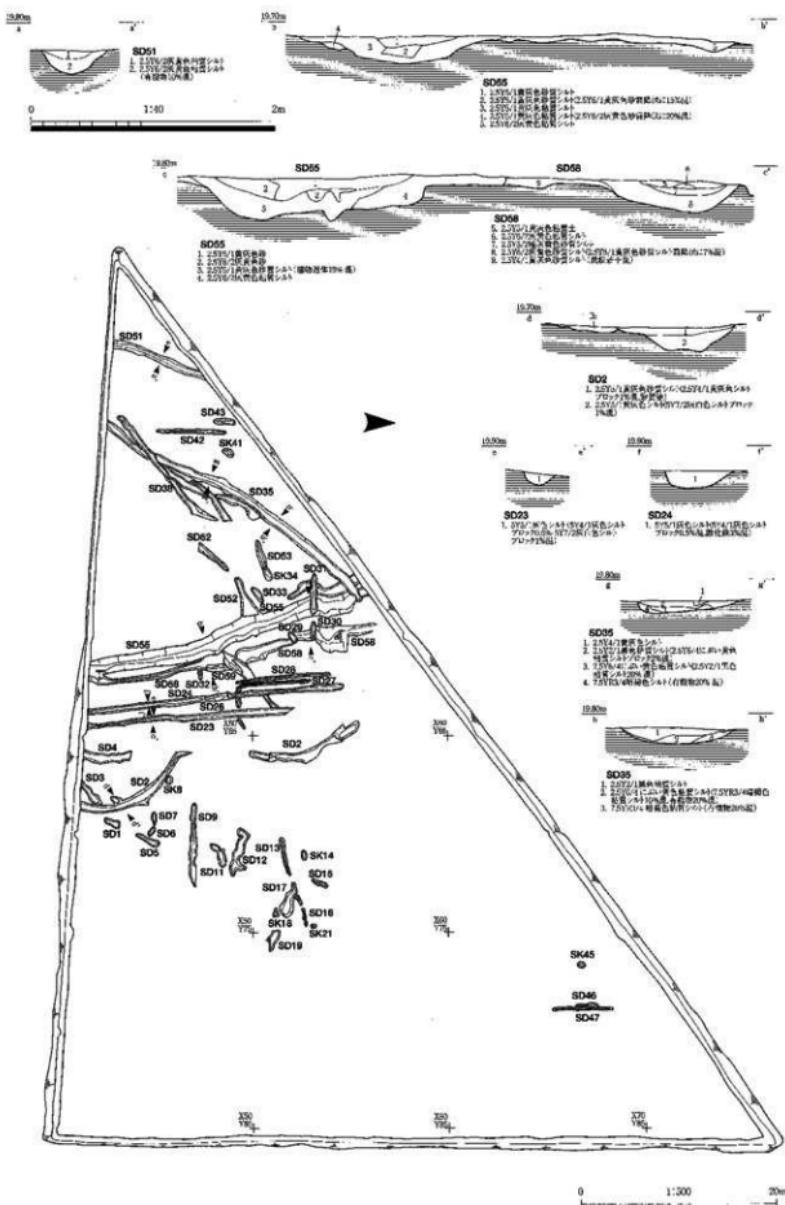
包含層の出土遺物（第100図, 図版57・58）

中世土師器・珠洲・越前・輸入陶磁器・越中瀬戸・唐津・伊万里・近代陶磁器・土人形・土鈴・木製品・石製品・金属製品（「寛永通寶」など）が出土している。25~28は越中瀬戸で、皿・鉢・水指し・蓋がある。すべて鉄釉がけの製品である。29~32は肥前系磁器。30・31は染付の皿で、圓線が巡る見込み中央には草花文などが描かれる。高台径は小さく、高台内側は施釉され墨付けには砂が付着する。17世紀中頃のもの。32は染付の丸碗。外面には竹籠文が、見込みには手描きの文様が施される。18世紀代に下る。木製品には桶の側板（33・34・36）や折敷の底板（35）がある。33の表面には「道願」の焼き印が残る。36は組み合せ式桶の側板で、相欠き部に目釘孔が1カ所ある。石製品には砾石の小片がある。石材は泥質凝灰岩、または凝灰岩と軟質のものである。

（島田美佐子）

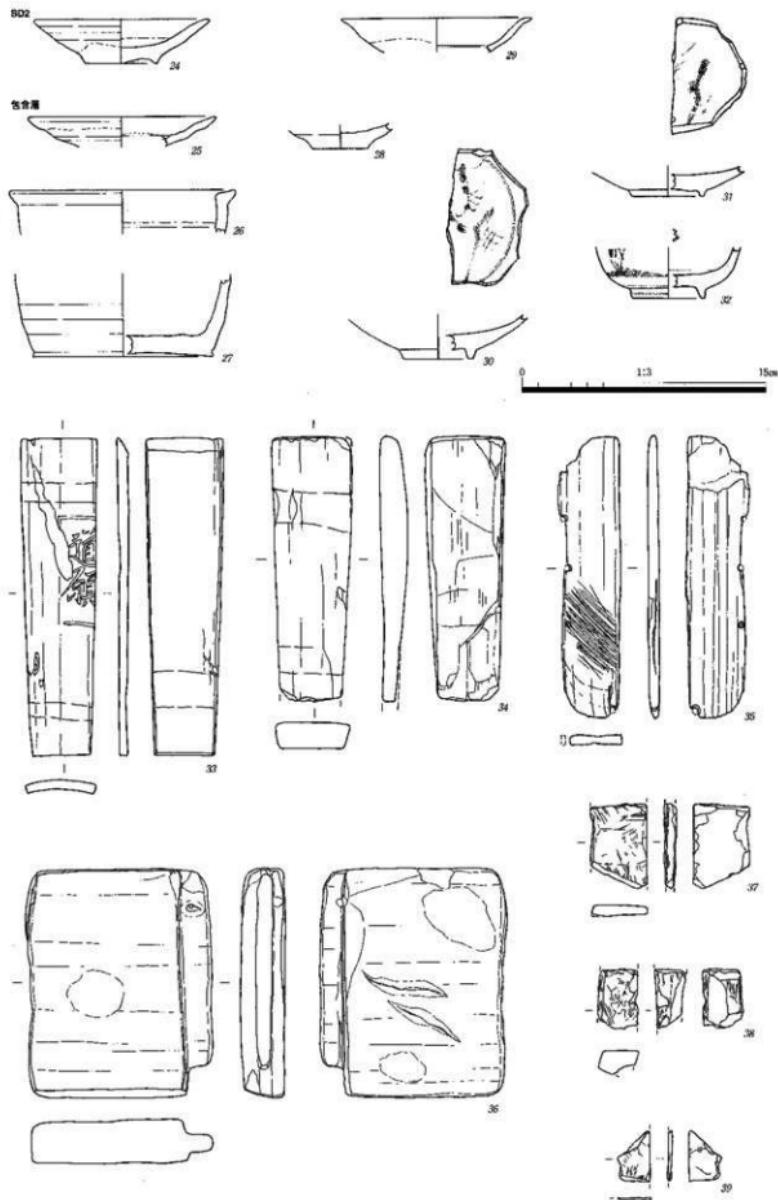


第98図 製島遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層



第99図 菱島遺跡 遺構実測図

SD 2・SD23・SD24・SD35・SD51・SD65・SD58



第100図 萩島遺跡 遺物実測図 (1/3)

SD 2(24) 包含層(25~39)

第12表 裘島遺跡 遺構一覧

遺構番号	遺構種類	字面番	規格(m)			出土遺物	時期	詳細時期	備考	博回番号	図版番号
			長さ	幅	厚さ						
SD2	溝			1.30	0.23	越中鐵門・加工板	近世～	近世～	99-100	36	
SD23	溝			0.08	0.10	珠洲・陶器・磁器	近世～	江戸～	99	36	
SD24	溝			0.81	0.14	越中鐵門・唐津	近世～	江戸～	99	58	
SD35	溝			1.15	0.12	土師器	近世～	江戸～	99		
SDG1	走路			90.00	0.20		古墳	古墳後	99		
SD55	走路			2.30	0.40	土師器・加工棒	古墳	古墳後	99		
SD58	走路			2.70	0.36		古墳	古墳後	99		
SD71	走路			0.97	0.12	ケルミ	縄文	縄文後	94		
SD85	走路			1.94	0.24	縄文土器	縄文	縄文後	94		
SK100	土坑	方形	1.50	0.79	0.08		縄文	縄文後	94		

第13表 裘島遺跡 木製品一覧

博回番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	直標	種類	法量(cm)			材質	特記事項
						長さ	幅	厚さ		
100	33			X55Y77	船檻板	19.5	4.8	0.8		「通路」の焼き印あり
100	34			X43Y81	船檻板	16.0	4.9	2.1		
100	35			X54Y77	舟底の板板	17.2	3.6	0.5		
100	36			X46Y84	組合式構?	14.0	11.5	2.4		舟底?の一部

第14表 裘島遺跡 石製品一覧

博回番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	直標	種類	法量(cm・g)				材質	特記事項
						長さ	幅	厚さ	重さ		
96	11	59-62		X56Y64	打製石斧	17.0	8.0	3.6	540.00	凝灰岩	先形
96	12	59-60		X46Y46	打製石斧	20.5	10.0	3.1	865.00	凝灰岩	先形
96	13	59-61		X61Y88	打製石斧	6.5	5.8	2.4	106.13	凝灰岩	刃部のみ
96	14	59		X60Y78	打製石斧	6.2	4.5	2.0	56.74	凝灰岩	刃部のみ
96	15	59-61		X55Y70	打製石斧	8.2	7.6	3.1	304.04	凝灰岩	刃部のみ
96	16	59-61		X63Y74	打製石斧	7.6	5.1	2.2	101.52	凝灰岩	刃部のみ
97	17	59		X66Y56	打製石斧	19.6	8.0	4.1	710.00	砂岩	先形
97	18	59-62		X55Y77	叩石	13.5	3.5	4.7	524.64	閃綠岩	先形
97	19	59-60		X53Y64	打製石斧	9.2	7.0	2.7	197.49	凝灰岩	基部のみ
100	27			X44Y69	砾石	5.2	3.5	0.7	18.11	泥質凝灰岩	
100	38			X54Y63	砾石	3.7	2.4	1.8	18.64	凝灰岩	
100	39			X43Y51	砾石	3.0	2.0	0.2	1.78	泥質凝灰岩	

第15表 美島遺跡 土器・陶磁器一覧

件名	遺物番号	出 所	形 態	施 工	泥 量(g)	口径 深さ	身 幅	身 高	斜十色測	斜色 測	輪 測	外記事項
95 1 56 香弓	X6A173-X6B1602	横文土器 滑抹	17.0	12.0	7.0	10Y86/3	に赤い黄褐色					NRI-6赤褐色の薄物
95 2 56	X6S72-73	横文土器 滑抹	20.0	12.0	7.0	576/1	灰白色					部分的に外側スズベ音
95 3 56	X4675/51	横文土器 滑抹	11.4			10Y86/2	赤褐色					口縁内側擦痕・内腹に黒い斑状付着
95 4 56	X41-5677-65	横文土器 滑抹				10Y86/2	灰褐色					部分的に外側スズベ音
95 5 56	X6A175	横文土器 滑抹				10Y87/3	に赤い黄褐色					外側擦痕の系膜
95 6 56	X4370/1	横文土器 滑抹				10Y86/2	灰褐色					外側擦痕の系膜
95 7 56	X57165/1	横文土器 滑抹	8.8			10Y87/3	に赤い黄褐色					外側擦痕の系膜・輪脚部に擦
95 8 56	X60787-X6C4	横文土器 滑抹	5.6			10Y86/4	に赤い黄褐色					外側スズベ音
95 9 56	X65-6773/1	横文土器 滑抹	9.0			10Y87/3	17.4赤褐色					外側擦痕の系膜
96 10 36	X65-6773/3	横文土器 滑抹	17.6			10Y87/3	17.4赤褐色					外側擦痕の系膜
98 20 36	X57-28784/1	横文土器 滑抹	17.6			7.0Y86/4	17.4赤褐色					外側スズベ音
98 21 36	X61788/1	横文土器 滑抹	17.6			10Y85/3	17.4赤褐色					外側スズベ音
98 22 56	X56717/1	横文土器 滑抹	15.8			10Y86/3	17.4赤褐色					外側スズベ音
98 23 56	X52769/1	横文土器 滑抹	10.6			10Y86/3	17.4赤褐色					外側スズベ音
100 24 58	S1/2	横文土器 滑抹	10.8	2.7	4.4	7.5Y87/3	に赤い褐色					外側擦痕
100 25 58	X61785	横文土器 滑抹	11.4			2.0Y71	灰白色					外側擦痕
100 26 58	X4675/1	横文土器 滑抹	13.7			2.0Y71	灰白色					に赤い褐色
100 27 58	X60784	横文土器 滑抹	11.0			7.5Y86/3	に赤い褐色					外側擦痕
100 28 58	X57169	横文土器 滑抹	3.4			7.0Y87/3	に赤い褐色					外側擦痕
100 29 57	X65724/1	伊万里	11.6			30/0	灰褐色					見込み・浅腹
100 30 57	X65781/1	伊万里	4.2			NB/0	灰白色					透明白
100 31 57	X56781/1	伊万里	4.1			NB/0	灰白色					透明白
100 32 57	X68752/1	伊万里	4.3			NB/0	灰白色					透明白

第V章 総括

江尻遺跡・蓑島遺跡の調査概要については、第III・IV章で概述したが、その結果江尻遺跡では縄文・弥生時代、中世から近代に至る複数の時期の遺構・遺物が、また蓑島遺跡でも縄文時代から古墳時代、近世の遺構・遺物が検出されていることが明らかとなった。とくに江尻遺跡では調査された遺構・遺物の数が多く、内容も多岐にわたっている。そこで本章ではとくに江尻遺跡の調査成果について簡単にまとめ、本調査の総括としたい。

1 近世以前の遺構・遺物

縄文時代

江尻遺跡では縄文時代の遺構・遺物は少ない。縄文時代の遺構としては、A・B地区で自然地形の痕跡である大きな谷状の落ち込みが、C地区ではその延長上で若干の溝群が検出されたに過ぎない。また遺物に関しては、晩期の土器が若干みられる他は、打製石斧が5点出土しているだけである。これらの遺物は主に縄文谷の埋没土や他時期の遺構から混入として出土しており、堅穴住居など集落遺構に伴って出土したものではない。江尻遺跡自体は庄川扇状地の末端に位置しており、20m弱の標高を数える。同様の立地でこれまでにみつかっている遺跡としては下老子笠川遺跡、高田新茅道遺跡、駒方遺跡などがある。いずれも庄川扇状地の末端に位置する標高10~20mのコント上に所在する縄文時代晩期の遺跡である。とくに下老子笠川遺跡では晩期の堅穴住居が11棟検出されており、低地部での集落の実態を示す貴重な調査知見となっている。下老子笠川遺跡は江尻遺跡の北東側に隣接する遺跡であり、本遺跡との係わりが想定できる。また今回報告した蓑島遺跡でも晩期の土器や打製石斧が出土しており、江尻遺跡とよく似た出土状況を示す。これらの遺跡の中には今後堅穴住居など集落遺構が発見される遺跡もある。しかし現段階では、江尻遺跡や蓑島遺跡のように遺物のみが出土する様相については、扇状地末端に展開する晩期集落の、集落縁辺部における牛糞活動の痕跡を示すものと捉えておきたい。

弥生時代

江尻遺跡では各調査区で弥生時代の遺物が出土している。これらの遺物は概ね弥生時代後期後半から終末期の時期幅のなかでおさまるものであり、弥生時代後期前半以前に遡るものや、古墳時代まで降るものは認められない。また遺構については、B・Cの両地区で検出されている。とくにB1地区の東端部では、弥生時代後期の堅穴住居を1棟検出した。この住居は縄文谷S D131の南岸に接して位置している。縄文谷自体は弥生時代にはほとんど埋没したようだが、一部が窪地とし痕跡を残していたらしい。このことを証左するように、住居より北側の縄文谷上では、小溝群を除き弥生時代の集落遺構は検出されていない。また堅穴住居自体は1棟のみの単独所在とは考え難いことから、この堅穴住居を住居域の北端とする集落が、B1地区の南側一帯に所在するものと考えておきたい。次いでB地区の北東側に位置するC地区は、調査地区自体が一段低く低湿である。ここでは主に溝群が検出されたが、このうちS D605では農業用の水利に関する遺構がみつかっている。C地区ではこの他にも包含層から弥生時代の木製農具である曲柄鍬が出土しており、付近に水田跡の存在も示唆されている。

江尻遺跡を含む砺波平野の弥生時代集落については、これまでにも西井龍儀¹¹、岡本淳一郎¹²、久々

忠義^①、長瀬出^②などによる論収がみられる。いずれも、集落の良好な調査事例に乏しい現況を念頭に置きながら、地形区分と水系単位をもとにした分布論的検討が行われている。これらの論収に添付される砺波平野の集落分布図を参照すると、遺跡群の設定に個人差はあるものの、大きくは庄川右岸中・下流域、小矢部川上流の台地・丘陵地域、小矢部川左岸の中・下流域、庄川左岸扇状地末端地域など大きく4地域程度に遺跡群がグルーピングされている場合が多いようである。このうち江尻遺跡は庄川扇状地末端近くの、小矢部川右岸に展開する遺跡群に含まれていることがわかる。この群に含まれる弥生時代集落としては、下老子笹川遺跡や石塚遺跡、糞島遺跡、石名山木舟遺跡などがある。このうち下老子笹川遺跡では平成8・9年に実施した能越自動車道関連事業の発掘調査で、弥生時代後期から終末にかけての集落遺構を検出している。これらの遺構には周溝をもつ建物や平地建物・堅穴建物など60棟の建物群がある。同遺跡は現在整理途上にあるが、報告書刊行のあかつきには砺波平野の弥生時代集落の一端が明らかになると期待される。但し下老子笹川遺跡では環濠などの施設を伴っておらず、また存続時期も現状では長期に及んでいない、集落に伴う墓域もみつかっていない、一時期に構成される建物の棟数もそれほど多くないなど、拠点的というよりは中規模以下の村落規模と考えられる。一方高岡市石塚遺跡の場合は弥生時代の全時期にわたる遺物の出土がみられるものの、現状では具体的な集落遺構の検出に乏しい点が惜しまれる。すなわち拠点的といえる遺跡が現状では砺波平野でみることができない。このような現況を念頭に置いて安易な拠点集落論や「クニ」の設定を戒める指摘が、最近長瀬出によってなされている。とくに北陸地域で畿内的な「拠点集落論」がどこまで通用するか確かに疑問な点も多く、今後に問題を残す。墓制についても畿内的な方形周溝墓が検出される一方で、山陰的な四隅突出墓が墓制として並立している。土器様式についても同様の傾向がみられる。このなかで弥生時代の集落研究についても、北陸的さらには富山的な地域的展開のなかでまず評価や類型化が試みられるべきであろう。いずれにせよ江尻遺跡の弥生時代集落についても、砺波平野全域での弥生集落の展開の中で位置づけていく必要があろう。

中世

江尻遺跡では古墳時代に入ると、しばし遺構・遺物の出土が途切れる。とくに本遺跡では、古墳時代・古代の遺構・遺物はまったくと言っていいぐらいみつかっていない。再び遺構・遺物が検出されるようになるのは中世になってからのことである。ただしそれも若干の溝類程度であり、掘立柱建物など具体的な集落遺構はみつかっていない。このなかでC地区においては道路の側溝と考えられる並走する溝（SD616・SD617）が検出されている。さらにB地区でもC地区の道路遺構の南北側の延長上で若干の溝群が検出されるが、掘立柱建物などの遺構は未検出に終わっている。中世の遺物については土師器皿・珠洲などが各調査地区的包含層や近世の遺構に混入する形で出土しており、中世の遺構に直接伴う遺物はほとんど認められない。このうち土師器皿では、中世前期に若干漸るものもみられるものの、概ね中世後期から戦国時代のものが多く見受けられる。これらの土師器皿はいわゆる「非ロクロ」の土師器皿といわれるものに該当する。これに対し同軸台成形の「ロクロ」土師器の皿はみられない。また珠洲については一部でI・II期の古手のものもみられるものの、口縁内端に波状文を施すV・VI期の製品が多く目につく。土師器皿、珠洲以外では中国陶磁（龍泉窯系青磁）や瀬戸美濃の小破片が若干みられる程度である。

（森 隆）

注1 西井龍彌 1985 「砺波平野進出の足跡―周辺地域の考古資料から―」『研究紀要』2 砧波敷村地域研究所

注2 久々忠義 2001 「となみ弥生人の足跡」『研究紀要』18 砧波敷村地域研究所

注3 向木淳一郎 1996 「庄川扇状地扇端部の福岡町江尻遺跡」『研究紀要』13 砧波敷村地域研究所

注4 長瀬 出 2002 「富山県における弥生集落の展開」『富山考古学研究』紀要第5号 財團法人富山県文化振興財團

2 近世の建物について

江戸遺跡で復元した建物は19棟あり、近世に属するものと考えられる。これらの建物は、ほぼ同じ敷地内で建て替えを行っており連続性のあるものと思われる。そこで、建物周辺の出土遺物、周辺遺構との切り合ひ関係・配置、柱穴形態などからⅠ～Ⅲ期の3時期に分けて、建物の配置や建物構造の変化とその特徴についてまとめたい¹⁾。

なお、ここで用いる用語について定義しておく。建物の短軸方向を横行、長軸方向を平行とし、建物の平面構造については遺構認識上で柱穴に囲まれた部分を中核屋、その外部及び張り出し部については補助屋と呼ぶものとする。建物規模についてはこの中核屋の部分を扱うものとする。また、楕円形柱穴は厳密には長方形であったり、円形に近いもの等を含むが、ここでは単に長軸・短軸に差のあるものを総称して呼び、楕円形柱穴をもつ掘立柱建物については楕円柱穴建物という略称を用いる。

A 江戸遺跡の建物

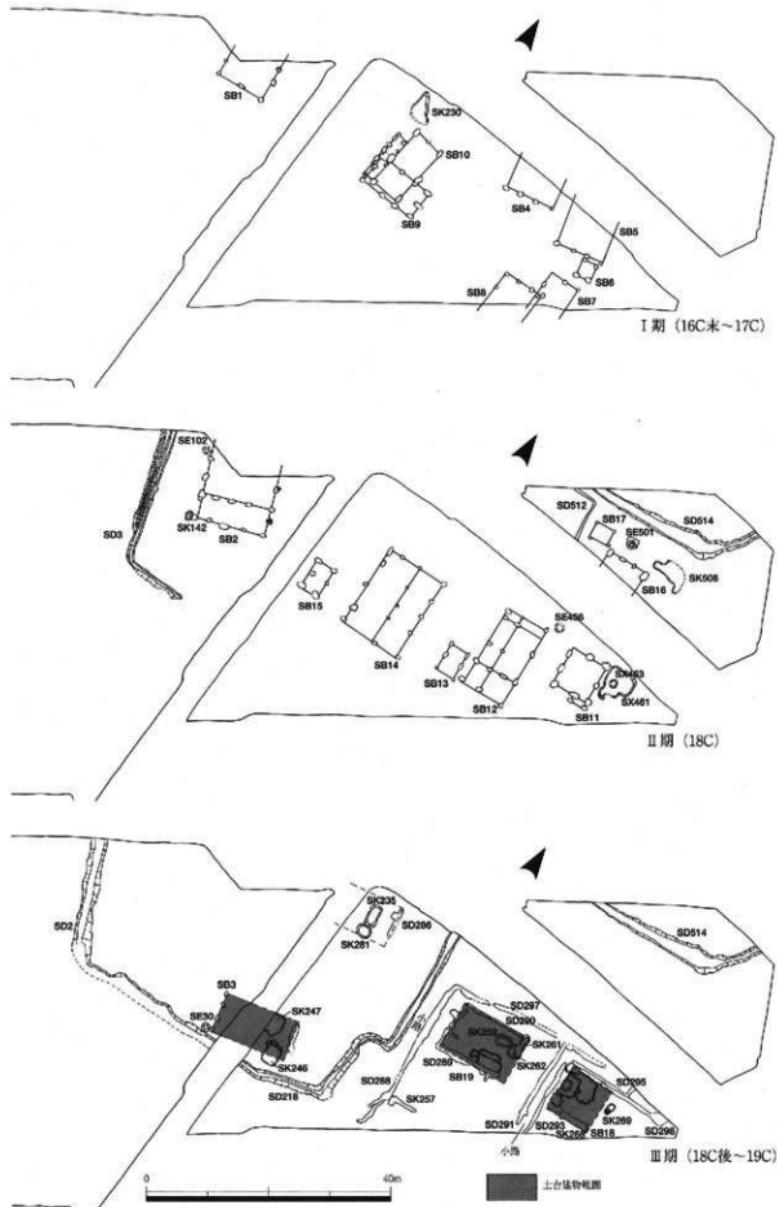
当遺跡の建物はⅠ期8棟、Ⅱ期8棟、Ⅲ期3棟の3時期に分けられ、さらにⅠ期の建物群は重複関係や柱穴形態の違い等から3小期に分けられると思われ、各々Ⅰ-1期・Ⅰ-2期・Ⅰ-3期とした。

Ⅰ期 Ⅰ期は3小期に分けられ、掘立柱建物からなる。Ⅰ-1期は当遺跡における建物の初現段階であり、16世紀末～17世紀前半を想定している。建物はB1地区の東側に5棟と、A地区に1棟の6棟からなり、いずれの建物も調査区外に伸びる南北棟の建物である。SB9・SB10は切り合ひ関係があり、棟方位は異なるがほぼ同位置・同規模の建物であることからSB10はSB9の建て替えと考えられ、Ⅰ-2期(SB9)・Ⅰ-3期(SB10)の2小期に分けた。Ⅰ-2期は17世紀中頃、Ⅰ-3期は17世紀後半とされている。Ⅰ-1期の建物は建物全体の規模等は不明であるが、柱穴形態等から判断した。柱穴はやや小型で円形と楕円形とが混じり、前者が主体をしめており、柱間は不均等である。これに対し、Ⅰ-2期・Ⅰ-3期の建物は楕円柱穴が主体で、柱穴規模がⅠ-1期に比べ相対的に大きくなり、Ⅰ-3期において顕著となる。SB9の平行の柱間は中央でやや寄っているが、柱間はほぼ均一で、SB10になると柱間が広くなる。SB10には建物の北西隅に位置するSK230が伴うものと考えられ、越中瀬戸を主体とした遺物が出土している。

Ⅱ期 掘立柱建物8棟からなり、18世紀代と考える。B2地区の北端に位置するSD514および、A地区的L字状に屈曲するSD3によって囲まれた(区画された)内部で確認できるもので、井戸3基、土坑3基がⅡ期に伴う遺構と思われる。柱穴は楕円柱穴が主体となり、柱穴の長軸と建物の梁または平行方向とが一致するようになる。建物規模はⅠ期に比べて大きくなり、大型の建物(SB12・SB14・SB16)と小型の建物(SB13・SB15・SB17)というセットになり、母屋と付属小屋にあたると思われる。SB2はSB1の、SB14はSB10の建て替えと考えられる。SE102はSB2に、SE501はSB16に伴う非丁と考えられるが、SE456は他に井戸が確認されていないことからSB11・SB12・SB14の3棟共有の井戸と考えている。SK142・SX463はそれぞれSB2・SB11に伴う便所遺構と考える。また、建物は西側のSD3および北側のSD514の方向に沿うような向きで並び、B1地区を中心として整然と配置されており、「屋敷地」が成立した段階と考えられる。

Ⅲ期 時期は18世紀後半～19世紀にかけてを想定している。建物3棟、SD2・SD218・SD288・SD291・SD293・SD295・SD297による方形区画、井戸1基、土坑1基からなる。遺構の分布範囲はⅡ期とほぼ変わっていない。ここで建物として扱っているのは全て土台建物と考えているが、土

2 近世の建物について



第101図 建物の変遷 (1:800)

台建物の下部構造がどのような痕跡として残るものなのか不明な点も多く、建物範囲は推定である。S B 3 は楕円柱穴の柱列から土坑（S K46・S X47）を囲む範囲（6.2×13m）を想定しており、S D 2 による一辺約50mの方形区画内に位置しており、S E 30が伴う。S B 18 は S K268 と不整形の落ち込み（S X457・S X458）によって囲める範囲（7.6×8 m）で、S D293・S D295により区画されている。S B 18 は S B 11 と重複しており、位置・規模ともにはば変わらないことから、S B 11 の建て替えと思われる。また、S B 18 の北東隅に位置する S K269 は桶底の埋め込まれた土坑で、便所遺構ではないかと考えており、S B 18 に伴うものと思われる。S B 19 は L 字状に曲がる S D289 と不整形の落ち込み、S D290 によって囲める範囲（8.4×12m）で、S D288・S D297・S D291・S K257 により区画されている。建物の棟方位は異なるが S B 12 とほぼ同位置にあたり、S B 12 の建て替えを考えている。それぞれの建物に伴う区画の間は帯状の空間となっていて小路になると思われる。また、B 1 地区の北西隅に位置する S D286 と S K235・S K281 を囲むような範囲（6.8×7.6 m）は S B 3 に平行な建物となる可能性があるが、ここでは取り扱わないものとする。Ⅲ期は建物が各々区画溝によって囲まれた方形区画を有し、より明確に敷地を意識しており、前段階（Ⅱ期）に成立した「屋敷地」が確立・定着する段階と考える。また、S D 2 は造構分布の西端にあたり、屋敷地の区画溝であるとともに村境のような性格を持つ可能性も考えられる。S D 2 はⅢ期以降、近代の屋敷地まで連続的に機能していたものと思われる。

B 県内の調査例

当財团における近年の調査は、梅原胡摩堂遺跡^{#2}・田尻遺跡^{#3}・地崎遺跡^{#4}・開辟大滝遺跡^{#5}等中世末～近世の遺跡が多く、その調査成果から中世後半から近世にかけての建物構造の変遷が明らかになってきている。それは、河西氏によると円形柱穴総柱構造→円形柱穴側柱構造→大型円形柱穴側柱構造→楕円柱穴側柱（梁行1間）構造というものである^{#6}。ここでは、当遺跡で主体となっている楕円柱穴建物（楕円柱穴側柱構造）および、土台建物の様相についてみていくたい。

楕円柱穴建物 县内で楕円柱穴建物が確認されているのは上市町弓庄城跡^{#7}、砺波市増山遺跡^{#8}、福光町梅原胡摩堂遺跡・田尻遺跡、福岡町開辟大滝遺跡等がある。梅原胡摩堂遺跡では16世紀代～17世紀代と考えられる楕円柱穴建物が35棟確認され、その特徴として①：柱穴が楕円形を呈すること、②：掘形に比べて柱自体は細いこと、③：柱穴底部に礎石や根巻き石がみられるものが多いこと、④：梁行1間が多く、柱間が広いこと、⑤：総柱建物に比べて楕円柱穴建物の面積が小さいこと等があげられている。また、楕円柱穴建物の付近に堅穴状土坑が確認されている例が多く、両者の間に密接な関係があるものと考えられている。⑥については、楕円柱穴建物は建物の中核屋部分のみを示すもので、隣接する土坑を含んだ空間を建物敷地と認識することにより、大差なくなるものと指摘されている^{#9}。田尻遺跡では16世紀～17世紀の大型楕円柱穴建物があり、柱穴底部に根固め（根巻き）石が検出されている。開辟大滝遺跡は16世紀中頃～末の木舟城の城下町遺跡で、51棟の建物が復元されている。棟持ち柱列あるいは中核屋部分が撤立柱となるもので、補助屋部分については土台・礎石の併用が想定されている。開辟大滝遺跡の楕円柱穴は比較的小型なものが多く、円形柱穴と混在しており、楕円柱穴建物への過渡期と捉えられている。

また、地崎遺跡では楕円柱穴建物ではないが、江尻遺跡とほぼ同時期の16世紀末～18世紀前半頃の建物4棟が確認されている。中でも S B 2 は礎石を併用した掘立柱建物で、中核屋（上屋）部分は大型円形柱穴からなり、北東隅に土間（土坑）を有する13.2×15.9mの建物で近世民家「イエ」の確立した姿と考えられている^{#10}。

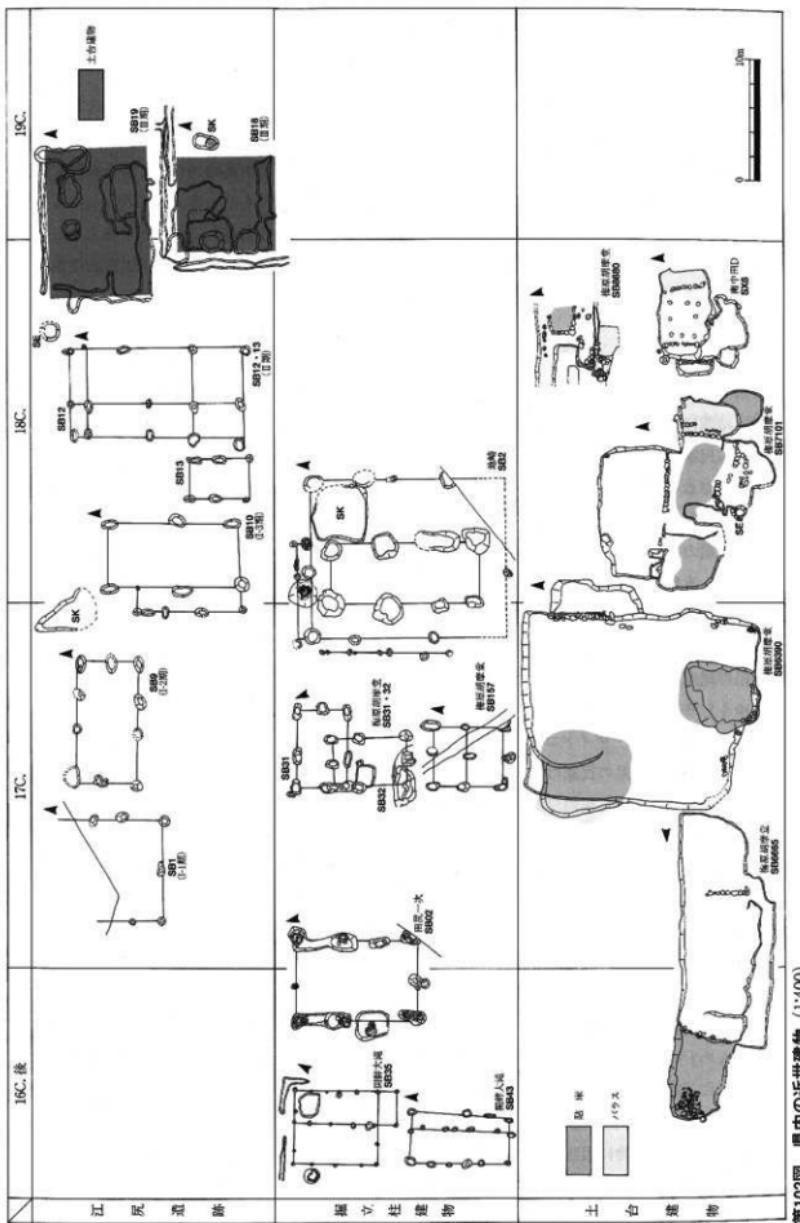
土台建物 土台建物と認識されている遺構は富山市南中山D遺跡¹¹¹、梅原胡摩堂遺跡、福岡町・小矢部市石名木舟遺跡¹¹²、婦中町道場I遺跡¹¹³等があり、石名木舟遺跡は16世紀代、道場I遺跡は15世紀代と考えられている。近世に属するものとしては南中田D遺跡と梅原胡摩堂遺跡の例がある。梅原胡摩堂遺跡では17世紀末～18世紀前半と考えられる、大型の方形または不整形の竪穴状土坑4例を上台建物と認識している。その特徴としてI：竪穴の縁辺部に石列が伴うこと、II：竪穴は埋め戻され整地されていること、III：遺構の構造ラインが不規則ではあるが直線的であること、IV：貼床をもつこと、V：竪穴の内外部に小礫を敷いたパラスがあること等があげられており、一種の規則性があるものと指摘されている¹¹⁴。南中田D遺跡は17世紀以降の上台建物の一部と認識されており、7.2×8.8mの長方形の土坑で、3列の石列を伴い埋め戻された土坑上面に2間×2間の礫石状の扁平疊が認められる。その特徴は梅原胡摩堂遺跡と一致している。中世末のものとして石名木舟遺跡では16世紀中頃～末と考えられる土台・礎石建物が10棟確認されている。土台建物には2タイプがあり、aタイプは廻りに溝を巡らして基礎部分とし、10cm程盛土して根太を置くもので、bタイプは溝を巡らせた内側が窪み浅い竪穴状になるもの（盛土をしない）である。両者に共通してみられる廻りを巡る溝は浅く細いもので、溝の肩に杭を打って固定したものもあり土台（根太）の痕跡と考えられている。

C 建物構造の変化

A項でみたように当遺跡ではII期からIII期にかけて屋敷地が確立すると共に、掘立柱建物（楕円柱穴建物）から上台建物という建物構造の転換がみられた。そこで、建物構造の変化がどのように進んだのか、前項あげたような県内調査例と比較検討してみたい。

当遺跡の楕円柱穴建物については、梅原胡摩堂遺跡で特徴としてあげたものの①・②・③をそのまま特徴としてあげることができる。③については、SB1・SB2で柱穴底部または埋土上面に小礫を敷いて礎石・根行としたと考えられる柱穴がある。さらに、当遺跡で共通していえることは、柱穴の長軸方向が梁行・桁行両方向と各々一致すること、柱穴の埋土は淡黄色シルトがブロック状に混じった黒褐色シルトの單層であることである。I期においては柱穴は小型で円形と楕円形が混在しており、I-1期では円形柱穴が主体となっている。I-2期で楕円柱穴が多くなり、II期になるとほぼ楕円柱穴に移行する。柱穴規模はI期において大きくなる傾向にあり、I-3期において顕著となる。また、建物規模はI期は全容の分かれるものが少なく定かではないが、比較的小型で均質な建物であるのに、II期になると100m²を越える大型のものと、25m²以下の小型のものがセットとなる。梅原胡摩堂遺跡などでは楕円柱穴建物と隣接した竪穴状土坑の密接な関係が指摘され、土台等を併用した補助屋空間が想定されているが、当遺跡では建物の付近に密接な関係にある土坑を見いだせず、「楕円柱穴による中核屋+土坑を含む補助屋」というバターンは成立しない。しかしながら、当遺跡のII期・III期の建物は県内の同時期の掘立柱建物に比べて面積が大きく、中核屋部分のみを示すのではなく建物敷地全体を示すものと仮定すると、II期における大型建物と小型建物というセット関係は「母屋（大型建物）と別棟の納屋・小屋（小型建物）」というバターンになると理解することができる。

次に、土台建物についてである。当遺跡の土台建物は梅原胡摩堂遺跡や南中田D遺跡のような石列・貼床・パラスは伴っておらず、溝と不整形の落ち込みによって囲める範囲を建物として認識したものである。溝状の部分SK268(SB18)、SD289・SD290(SB19)は石名木舟遺跡のような根太等の痕跡と考えられる。SB3は楕円柱穴の柱列と土坑を囲める範囲を建物と想定したもので、SB18・SB19が上台建物として完成した形とするなら、掘立柱と上台の折衷形と考えられる。また、SB18・SB19はII期のSB11・SB12のほぼ同位置での建て替えと考えられ、SB19は棟方向は異



第102図 県内の近世建築 (1:400)

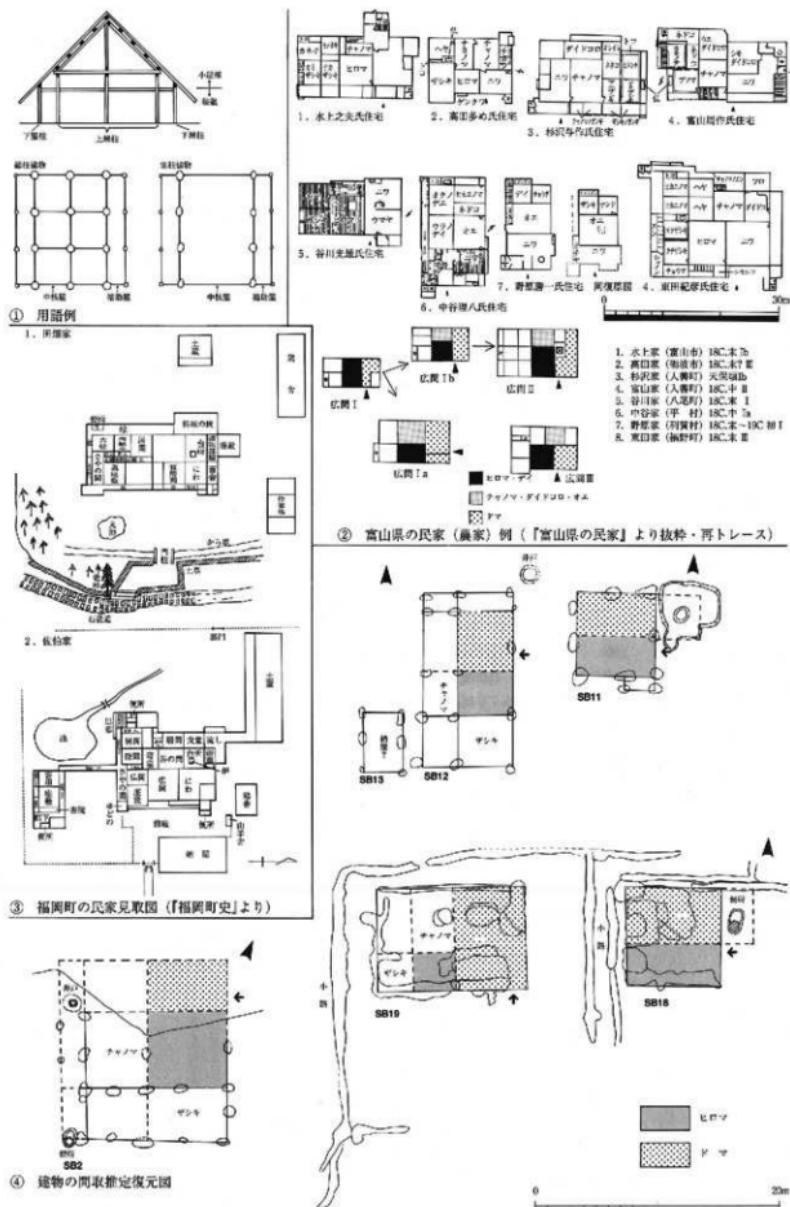
なるものの規模的にも前段階と大差なく、Ⅱ期の楕円柱穴建物とⅢ期の土台建物の敷地面積はほぼ一致しているといえる。さらに、Ⅲ期には建物同士を区画する区画溝が現れ、屋敷地が確立すると考えられる。

当遺跡では16世紀末～17世紀代（Ⅰ期）以降建物がみられ、18世紀（Ⅱ期）まで掘立柱建物（楕円柱穴建物）が主体を占めており、18世紀後半（Ⅲ期）になって土台建物に転換する。掘立柱に土台を併用するタイプの建物はⅢ期には存在しており、楕円柱穴建物から土台建物への建て替えが同位置・同規模で行われていることからも、前者から後者への転換は連続的なものと考えられる。このことから、当遺跡では18世紀代に掘立柱構造（楕円柱穴掘立柱構造）→土台建構造という変遷が追えるものと思われる。なお、石名田木舟遺跡では16世紀代に土台建物がみられるが、当該遺跡が木舟城の城下町（町屋）という特殊な状況下にあるため、一般村落で土台建物に転換するのとは若干の時期差があるものと思われる。

D 近世民家としての建物

富山県の現存する古民家は17世紀に遡る例がほとんどなく18世紀以降のものになるが、当遺跡とはほぼ同時期にあたることから、当遺跡の建物例について近世民家の間取りという点から考えてみたい。富山県の民家の特徴としてはヒロマを中心とした間取りと構造をあげ、その大きさから広間Ⅰ～Ⅲ型に分類がされている¹²⁵。また、東向きの家が多く、付属屋を持たず主屋の中に生活機能を取り込む「單棟集中型」をとる傾向があることも指摘されている¹²⁶。これらの特徴を踏まえ、当遺跡をみてみると、Ⅱ期のSB2・SB11・SB12、Ⅲ期のSB18・SB19について建物の間取りを推定することができた。SB12は東向きの広間Ⅲ型もしくはⅠb型で、砺波市の高田家に類似している。南側の1間分がザシキ・ナンド、中央前面がヒロマ、奥がチャノマ、北寄りがドマにあたり、楕円柱穴の長軸方向は梁方向に揃うことになる。ヒロマ（+ドマ）部分を核に南北に1間づつ拡大したような構造は、富山県の民家が「ヒロマ部分が構造的な中核であり、他の部屋はヒロマにもたせかけるように縦ぎ足してゆく」¹²⁷という特徴を有するのと一致する。SB2はSB12と同様の間取りで、建物の北西隅に井戸がありチャノマ・ダイドコロに近い位置にあたる。また、SK142は便所と考えられる遺構であるが、基本的に富山県の民家の場合強い西南風が多く吹くことから便所は家の北東側にくるものが多いのだが、当遺跡と同じ福岡町所在の田畠家や佐伯家¹²⁸のようにザシキの奥に便所を設け「カミベンジョ」として主に公用に用いていたとされる例もあり、SK142はこれにあたると思われる¹²⁹。SB19は南向きの広間Ⅰb型で、L字に曲がるSD289が途切れる南東隅が入り口にあたり、不整形落ち込み（SK259・SK262）の部分がドマ、西側半分がヒロマ・ザシキに相当すると考える。SB11・SB18は建て替え関係にあり、間取りもほぼ変わっていないと思われる。東向きの広間Ⅰ型で、北側がドマ、南半分がヒロマにあたると思われ、玄関前の北東隅に便所（SX461・SK269）を設けている。富山県西部の砺波・射水平野では広間型が主体で、ザシキ・ヒロマ・ドマの三室は後ろの下屋部分に対して「前三坪」という俗称で呼び家の主体部分と考えられていた。これに対し「前二坪」・「二坪もの」等と呼ばれるザシキを付けないヒロマとドマからなる建物も存在し、小前の者が分家する時などに「前二坪」の家を建てる場合があったという¹³⁰。このことから、SB11・SB18は建物面積が43.5m²・60.8m²と他の建物に比べて小さく、当初推定範囲外にさらに広がる可能性も考えたが、所謂「前二坪」の建物に相当するのではないかと推測した。

当遺跡の建物について以上のような間取りの推定から、少なくともⅡ期（18世紀）の段階において近世民家の構造が成立していたものと考えらる。Ⅲ期の土台建物はより近世民家の特徴をもつと



第103図 用語例・富山県の民家例・福岡町の民家見取図・建物の間取推定復元図

思われ、近世民家の成立=土台建物（への転換）とは単純にはいえないが、近世民家成立期の建物と捉えてもよいかと考える。また、梢円柱穴建物についても、富山県のみでなく中世後半～近世における東北地方などに類例がみられるところから、当該時期の建物の1タイプとして成立するのではないかとも考える。軸組構造・小屋組構造といった建築学的な検討には至れなかったが、この点については今後検討を重ねてゆきたい。

(金三津道子)

注1 以前、調査後の概要においてまとめたものを、再度検討・改変した。

三島道子 1996 「江尻遺跡の建物について」『埋蔵文化財調査概要 平成7年度』 財団法人富山県文化振興財団

注2 財団法人富山県文化振興財団 1994 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）」

注3 財団法人富山県文化振興財団 1996 「梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告」

注4・注5 財団法人富山県文化振興財団 2000 「開辟大池遺跡・地崎遺跡発掘調査報告」

注6 河西健二 1994 「第IV章まとめ 3 中世末から近世の建物」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』

財団法人富山県文化振興財団

注7 上市町教育委員会 1981～1985 「弓庄城跡 第1次～第5次緊急発掘調査概要」

注8 衛府市教育委員会・衛府市郷土資料館 1991 「増山城跡調査報告書」

注9 注6に同じ

注10 河西健二 1994 「遺研究レポート 1 雜記 建物遺跡 古墳から近世まで」『埋蔵文化財年報（5）』

財団法人富山県文化振興財団

越前慎子 2000 「第V章 4 地崎遺跡における若干の考察 A 近世民家」「開辟大池遺跡・地崎遺跡発掘調査報告」

財団法人富山県文化振興財団

注11 富山県埋蔵文化財センター 1990 「南中山D遺跡発掘調査報告書」

注12 財団法人富山県文化振興財団 1995 「埋蔵文化財年報（6）」

注13 財団法人富山県文化振興財団 1999・2000 「埋蔵文化財調査概要 平成10年度・11年度」

注14 注6に同じ

注15 富山県教育委員会 1970 「富山県の民家（民家緊急調査報告回録編）」

1980 「富山県の民家（民家緊急調査報告書）」

注16 佐伯安一 1973 「衣食住」『富山県史 民俗編』 富山県

1996 「富山県の民家」『平成7年度埋蔵文化財発掘調査専門職員等研修会資料』

注17 注15に同じ

注18 福岡町 1969 「福岡町史」

注19 佐伯安一氏のご教示による。

注20 佐伯安一 1973 「衣食住」『富山県史 民俗編』 富山県

杉本尚次 1975 「古代住居とその系統 地理学的・民俗学的考察の試み」『日本古代の探求 家』 社会思想社

注21 福島県考古学会・福島県考古学会中世部会 2000 「東北地方南部における中世集落の諸問題」

3 近世の出土遺物について

今回の江尻遺跡の調査では、近世から近代にかけての陶磁器が多く出土している。これらの資料は量的にもまとまっており、かつ集落遺構が伴っている。従ってこれらの遺物の種類や内容が、当地に居住していた人々の生活内容的一面を反映したものであることは間違いない。これらの遺物には越中瀬戸・丸山など在地の焼物の他に、唐津・伊万里・瀬戸・関西など各地の生産地から当地に流通した陶磁器類がある。生活遺物としてはこの他にも木製品、鉄製品、石製品などもあるが、ここでは陶磁器についてのみ概観し、生産地の種別組成の特徴などについて簡単にまとめておきたい。

A 考察の方法

出土遺物に関する考察の基本は、焼物の種類、生産地、時期の識別がまず第一となる。これにより出土遺物の大まかな傾向と様相が把握できる。ついで各焼物別および器種別の具体的な組成率が問題となる。今回は最も単純な破片数計測法によって分析を行った。カウントは、各時期の遺構出土のものを対象とした。包含層出土の遺物については計測の対象外としたが、重要なものについては、組成模式図の方に一括した。また器種別の組成表は今回作成しなかったが、必要に応じて各個に言及した。なお本遺跡の場合、近世・近代を通じて遺跡が継続している。このため遺構の重複・搅乱が著しく、新旧遺物の混在が、少なからず認められた。従って計測結果については、あくまでも一つの目安としておきたい。

B 近世の建物に伴う陶磁器組成

江尻遺跡では、A・B両地区あわせて19棟の建物が検出されている。建物群の存続年代は17世紀から19世紀・幕末頃までの約200年間と考えられる。このうちA地区の建物群の規模がやや大きいことを除くと、他は比較的小規模な建物跡が多く、下級農民層の居住者を想定している。出土遺物には当然時期幅があるが、今回はB1地区のS D291~293・S K258・S K281から出土した遺物をとり上げた。これらの遺構には出土点数にバラツキがあるため、組成の実数は破片数の積み上げ比率と100分比率の二本立てとした。以下に各遺構別のカウント結果について記しておく。

まずS D291は計測数24点で、内訳は越中瀬戸20.3%、越中丸山4.2%、唐津8.3%、伊万里8.3%、瀬戸16.7%、関西4.2%、その他37.5%となる。遺構は、B1地区 S B18土台建物に伴う区画溝である。とくに溝底面直上から出土した丸山と関西系施釉陶器で、建物の廃絶時期を決めている。両者は19世紀～幕末頃に位置付けられる。次にS D292は計測点数48点を数える。内訳は越中瀬戸43.8%、越中丸山6.2%、唐津14.6%、伊万里14.6%、瀬戸14.2%、関西8.3%、その他8.3%である。越中瀬戸が過半近くを占めるが、他の遺物は19世紀～幕末頃のものが多い。遺構の性格は不明。S D293は計測数11点と少ない。内訳は越中瀬戸81.8%、唐津18.2%、唐津には1点17世紀代の古手の鉄粒輪を含む。遺構はS D291に併走する、土台建物 S B18の区画溝と考えられる。次に土坑について述べる。S K258は計測数6点と少ないが、越中瀬戸32.5%、唐津32.5%、伊万里17.5%、その他17.5%となる。唐津には17世紀末から18世紀前後の時期の、三島手の刷毛目柄や播鉢が多く見られる。掘立柱建物期の遺構と考えている。最後にS K281はSK27と対で検出された土坑で、計測数は13点。内訳は越中瀬戸15.4%、唐津15.4%、内野山23.1%、伊万里38.5%，その他7.6%で、伊万里には蓋付碗、青磁香炉、交叉草文の小皿などがある。数は少ないが、やや上手の印象を受ける。18世紀後半のものが主体で、比較的短時期構成の遺構と思われる。

C 近代の建物の伴う陶磁器組成

近代面では、明治中期の屋敷跡が検出されている。屋敷地は周囲を溝で区画されており、溝の中から多くの遺物が出土している。この溝は、A地区側では一部近世の溝と重複している部分があるため、今回はB地区側の出土遺物を計測の対象とした。また屋敷に伴う溝ではないが、B地区的S D223からも遺物が多く出土した。この2つの溝を中心には、S D223に併走する小溝S D298と屋敷地内の土坑S K251を計測の対象とした。なお組成のリストには、新たに銅版刷りの磁器染付の項目を付け加えた。また、その他には在地系と考えられる磁器染付を含めてカウントした。

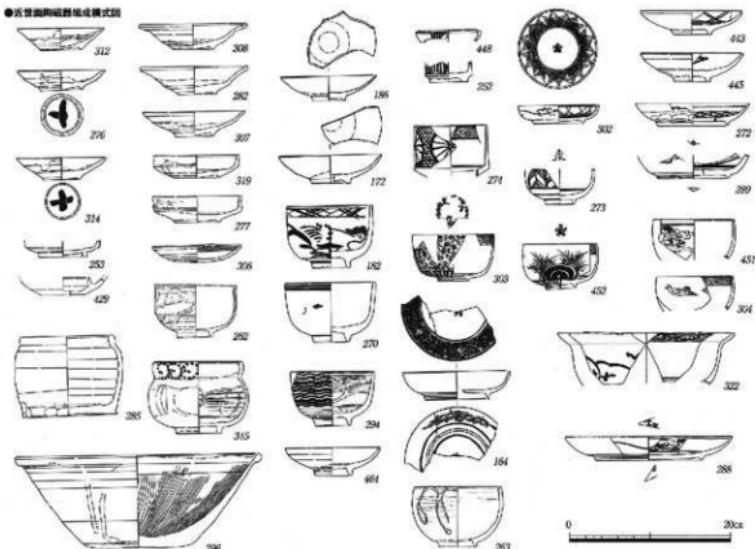
まずB1地区の屋敷地区画溝S D218では、163点を計測の対象とした。内訳は越中瀬戸4.9%、越中丸山0.6%、唐津18.4%、伊万里32.5%、瀬戸14.8%、関西1.8%、銅版染付2.5%，その他24.5%となる。組成の主体は依然伊万里であるが、瀬戸の磁器染付が増加し、定量を確保している。伊万里は、18世紀代のやや上手の製品が多く含まれるが、端反り楕など幕末頃のものも含まれる。瀬戸は磁器染付が大半で炻器染付はほとんど見られない。また、広東碗の型式が中に含まれている。銅版染付は型抜き成形とロクロ挽きの両者がある。明らかに明治以降の製品である。また瀬戸にはないタイプの色絵磁器があるが、県内の出土資料では散見されることから、在地系の製品と捉えておく。近世の唐津製品もある程度の出土があるが、この時期まで伝承・使用されていたのかよくわからない。関西系では、磁器染付と施釉描鉢の二者がある。総体として磁器製品が過半を占めるが、伊万里以外に瀬戸や関西系、在地系の製品が増加している。次いでS D223であるが、計測数は163点。内訳は越中瀬戸55.4%、唐津13.1%、伊万里14.9%、瀬戸2.9%、銅版染付2.3%、その他11.4%である。この中で越中瀬戸が過半を超える点が注目される。これらの越中瀬戸は、S D223の中でも比較的限定された範囲で集中して出土した。また完存個体こそ無いものの、接合する資料も多い。何らかの理由で一括投棄された印象を受ける。S D223は切り合い関係より、近世の土台建物に後出し、近代の屋敷地跡より先行することが判明している。また溝内からは「戸長役場」と書かれた木札が出土しており、明治前期に年代の一端をおさえることができる。小文ではやや時期幅をもたせ、幕末から明治前期にかけての溝と捉えておく。一方S D298は、S D223と並走する小溝である。計測の対象は24点である。内訳は越中瀬戸8.3%、唐津20.9%、伊万里33.3%、その他37.5%である。伊万里は蛇目凹高台で内面に山水を描く鉢、矢根文の湯飲み、菊文の筒形湯飲み、やや上手の小皿、波佐見の蛇目釉刻・交叉文の小皿などが見られる。唐津には、擂鉢と陶胎染付がある。18世紀から幕末までのものが多い。最後にS K251は計測数23点。内訳は唐津17.4%、伊万里56.6%、瀬戸13%、その他13%である。伊万里は口錆びで内面に五花弁文を有するやや上手の皿、菊花状に型抜きする白磁の皿、青磁の香炉などが見られる。青磁香炉は、屋敷溝S D218出土の青磁香炉と接合関係にあり、両遺構の同時期併存が確認できる。この土坑は、屋敷地の前庭にある洗い場の池と考えられる。

D 小結

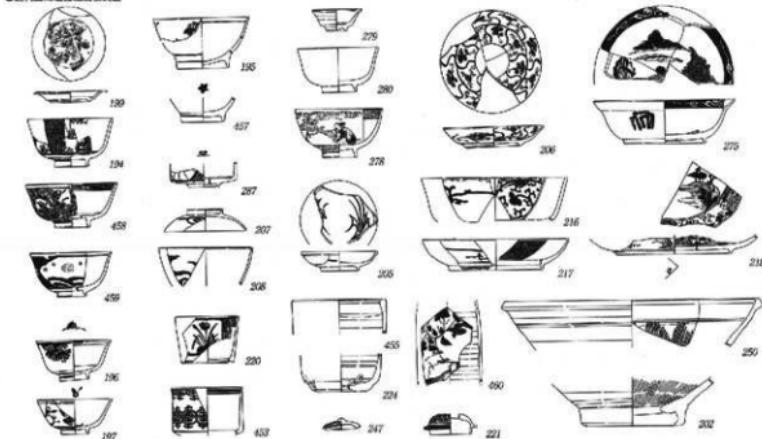
最後に本遺跡の陶磁器組成について、計測結果を加味しながら、気付いた点をまとめておく。

- ①近世面 近世面の建物群の時期や内容については、折に触れて言及してきた。この中で一部の建物には掘立柱建物間相互の建て替えや、掘立柱建物から土台建物への転換が見られ、少なくとも3期以上の時期的変遷がみられた。但し残念ながら陶磁器の組成に関しては、各時期別に細別できる状況ではない。S K235・S K258・S K281など比較的短時期に限定できる遺構も存在するが、組成を検討し得るだけの遺物量がない。一方溝の出土遺物は量的に土坑などの出土遺物に卓越するものの、存続時期についてはやや幅がある。また短時期の一括投棄が認定できる遺物群もあまり見られない。そこ

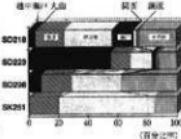
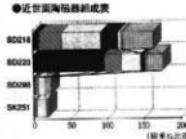
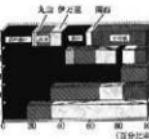
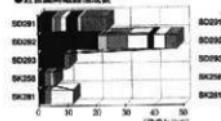
●近世面陶器組成模式図



●近代面陶器組成模式図



●近世面陶器組成模式図



第104図 江戸遺跡の近世・近代面陶器組成模式図・表

上段: 中瀬戸(353・276・277・282・285・286・303・312・314・319・429) 茶中丸山(262・315)
内野山(172・186) 唐津(182・270・294・296・464) 伊万里(164・252・272~274・288・289・302~304・322・
443・445・448・451・452) 関西(263) その他(306)
中段: 第一焼付茶(194・199・458) 在地焼付茶(459) 濱戸(195・196・287・457) 伊万里(205~208・216~218・
220・224・247・275・455) 関西(221・460) 越中瀬戸(202・250) その他(278~280)

でやや曖昧であるが、あまり詳細時期にこだわらず、陶磁器組成の全体的な傾向と特質についてまとめておく。

まず全体的印象としては、やはり越中瀬戸が18世紀以前の古い時期は卓越するようである。次いで17世紀後半から18世紀の早い段階は、唐津製品が当地にも流通するようになる。製品には三島手の刷毛目焼や陶胎染付など茶陶的器種と、擂鉢など調理系器種に二分される。この段階でも日常の供給用雑器には越中瀬戸の比重が高いことが予想される。また内野山の製品もこの時期定量入っているが、この傾向は少なくとも富山県下では汎地域的様相であるといえる。一方伊万里は初期製品が少量見られるが、大半は18世紀代、それも後半以降の製品が多く目に付く。18世紀前半代の製品は、本遺跡の場合、波佐見の雑器的製品を含めて、出土量があまり多くない。ただしこれはB地区の様相で、A地区では18世紀前半代の肥前磁器が定量見られ、同じ遺跡でも建物群によって、磁器の入手時期に較差がある。これは居住者の階層差に起因する様相と解釈できる。但し18世紀後半以降については、この較差は解消されており、19世紀から幕末にかけて、瀬戸・関西系などの陶磁器も流入し、流通機構の活化化、消費の拡大化傾向が看取できる。

②近代面 近代では、明治中期の屋敷跡の組成復元が中心となる。陶磁器の組成では依然伊万里の伝世品に比重があるものの、瀬戸・関西・在地の磁器染付が量を増やす。瀬戸製品では磁器染付が大半を占め、廉価品の炻器染付がほとんど見られない点が興味深い。炻器染付は雑器的な器種として、あまり伝世しなかったのであろう。これに比べ伊万里は近世面よりも器種が豊富で、上手のものが比較的多い印象を受ける。なお銅版刷りなど印判手の磁器染付は、まだそれほど多くない。なおこの屋敷地の居住者には、上級農民層を想定している。また包含層ではあるが、中国明末・民窯系の呉須手染付の細片や、朝鮮半島産の黒釉陶器の破片なども出土している。

以上、本調査地の近世・近代の陶磁器組成について、簡単に素描した。もとより該期の陶磁器研究は、県内でもまだこれからの段階であり、今後の調査資料のさらなる蓄積に期待したい。

なお小文の作成に際して、九州陶磁文化館の大橋康二氏と、瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏には、数々の貴重なご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

- 越中瀬戸燒発祥四百年記念講習会実行委員会 1988 『越中瀬戸燒発祥四百年記念誌』
- 定坂武敏 1974 『越中の焼きもの』
- 大橋康二 1974 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
- 大橋康二 1988 『別冊太陽 古伊万里』 平凡社
- 大橋康二 1988 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 小川啓司 1974 『そば猪口絵柄事典』 光芸出版
- 佐藤浩司 1974 『近世擂鉢考』『はかた第2号』
- 田口昭二 1983 『美濃焼』 ニュー・サイエンス社
- 田口昭二 1993 『美濃窯の焼物』 多治見市教育委員会
- 藤澤良祐他 1994 『瀬戸市史 陶磁篇-5』 瀬戸市

4 近代の屋敷跡について

A はじめに

江戸遺跡の本年度の調査に際して、近代の屋敷地跡（民家）と考えられる遺構が検出された。もとより民家の研究は建築史や民俗学の分野に属するが、とくに散居村で有名な砺波平野では、民家の研究についても優れた業績と豊富な資料の蓄積がある。そこでこれらの研究成果を参考しながら、当地の近代屋敷地跡の復元を一考してみたい。

B 江戸遺跡の近代遺構

近代遺構自体はA・B両地区でみつかっているが、屋敷跡はA地区北東側からB地区南側にかけての地域でみつかっている（第45図）。その範囲はおよそ東西40m、南北40m程度で、中央をA・B両地区的境界となった農道で南北に分断されている。この範囲のなかで、東・南・西の三方を囲まれる矩形の区域が屋敷地の範囲を示すものと考えられる。北限については調査区域外となるため正確な敷地面積はわからないが、北側に旧道がかつてあり、その付近を屋敷の北辺とした場合、およそ2000m²の敷地面積が予想される。この屋敷地内には薄い整地土層の広がりがみられ、その上面において若干の建物関連と考えられる遺構が検出された。これらの遺構には井戸・桶底土坑などの土坑類、溝などがある。また建物の基礎の一部と考えられる遺構も検出されている。以下にこれらの遺構の概要についてまとめておく。

まず屋敷地を巡る区画溝がある（A地区 S D 2・S D 4、B地区 S D218）。この溝は屋敷地の四辺のみで完結する空堀状の溝ではなく、周辺農地への用水路の一部を屋敷地の区画に取り込んだものと考えられる。つまり屋敷地の南・東辺の溝は、それぞれ西側と北側に開放されており、これに西辺のやや規模の小さな溝をつけ加えて屋敷地の区画とする。中心となる南・東辺の大溝は、最も幅の広い部分で約2.5m、深さ1mの規模を有する。水は西側から取り入れ北側に流す。この区画の溝の内側に、盛土した整地層の広がりがみられる。この整地層は、A地区においては区画の内側の全域にみられ、その一部は西辺溝を超えてさらに広がっている。一方B地区では整地土層の広がりはある程度限定されており、調査地区の西壁に沿った東西10m、南北20mの範囲に比較的厚く分布し、その外側の部分については徐々に薄くなり消失する。整地土層の厚さはB地区で最大でも0.15m程度である。次いで整地土層の上面で検出された遺構であるが、まずB地区では建物の基礎の一部と考えられる遺構 S X224が検出された。この遺構はまず整地土層の上面に礫を敷き、その上に方形の切石と平瓦を並列して南北に並べている。間にこれらを瓦列を二分するように棧状の木板を渡し、両者を間仕切る。さらに瓦列の東側に円形の石臼を1個据え置いている。この石臼は、建物に柱を立てる際の束石か礎石に転用されたものかもしれない。また平瓦の上には、3個体の磁器が完形で伏せられた状態で出土した。この遺構は、その検出状況からもこれだけで単独の遺構を形成していたとは考えられず、建物の基礎の一部が何らかの理由で取り壊されずに残ったものと考えられる。平瓦の上に残された3点の磁器がこの辺の事情を示唆するが、どのような意図で残されたのかはよくわからない。一方 S X224 の北側約10mでは、桶底土坑 S K215が検出された。ちょうど整地土層の北側の切れ目の付近に位置する。土坑の平面形態は内径80cmの円形で、深さで40cm分が残存する。またこの桶底土坑を中心に、周辺に1m四方の礫敷きがみられ、その南側にはさらに東西方向にのびる細長い礫敷きの広がりが観察された。従ってこの付近についても建物本体の一部に取り込まれていた可能性が高い。また S K215に隣接して北側に3m四方の方形土坑 S K214があり、両者が一連の遺構である可能性もある。ま

たS X224の東側には方形土坑SK251がある。SK251は整地土の切れ目の東側にあり、区画の溝に近い位置にある。この土坑は南西角から小溝が分岐しており、大溝と連結する。その後の遺物整理の過程で、SK251と人溝の出土遺物の中に接合するものが含まれることが判明し、両者の同時期併存が確認された。また大溝自体もこのSK251を避けるように屈曲しており、両者の併存が傍証された。同様の遺構がSK251の対岸でも検出されている。こちらは大きな溝状の遺構で、全長約10m、深さ0.6mの規模を有する。この土坑の長さはほぼ大溝の屈曲部分の全長に相当する。また大溝に連結する小溝が両端にみられ、南側から取水し一旦土坑内に水を溜め、北側に流す構造を有している。SK251についても同様の水溜め土坑と考えられるが、排水専用の小溝がないところをみると、一本の小溝で取水と排水の両者を調節したのであろう。一方A地区側では井戸跡SE21が検出されている。井戸は径1.7m、深さ1.6mで、石組構造のものである。井戸の下層にはくり抜きの丸太と木臼を三段に重ねて井筒としていた。なお、この井戸と区画溝以外の遺構はA地区では検出されていない。

以上が近代の屋敷地に関連すると思われる遺構である。この他に近代に比定される遺構としては、B2地区で検出された道路遺構がある。道路は幅員約5mで、両側に側溝と考えられる小溝が二本並走する。この道路はほぼ東西方向にのびている。またその位置は、先述の旧道の位置に重複する。その南側のB1地区でも、やはり東西にのびる溝二条が検出され、旧道に併走する農道などの小道と考えられる。幅員は約3m弱。この小道の北側側溝であるSD223は、幅のある構造的な溝で、農業用水路と考えられる。SD223の西側は屋敷地の区画溝と直交しこれに切り込まれている。従ってSD223の方が、時期的に屋敷地の区画の大溝に先行することがわかる。このSD223からは、屋敷地の成立年代を考える上で重要な遺物が出土している。この溝の下層から出土した墨書きの木札（第81図645）のことである。木札には「戸長 小神村・小矢部村 役場」と書かれている。裏面にもやはり上部に「役場」と書かれ、さらに判読できない文字が続けて朱書きされている。この「戸長役場」とは明治の廢藩置県以後明治22年の市制・町村制が施行されるまでの間、地方に置かれた役所のことである。より正確には明治12年の「戸長役所」から「戸長役場」への改称以降明治17年の戸長役場制度改正までの5年間に限定できる。一方「戸長」とは、明治4年の戸籍法によって設置され、明治11年の郡区町村編成法の成立以降、各町村または数町村に戸長1名が置かれ、地域の行政事務に従事した。戸長の選出は多くは民選で、旧村の名主・庄屋層、豪農などが選ばれることが多く、また執務自体も戸長の私宅で行われることが多かったという³¹。なお小神村・小矢部村は共に現小矢部市内にあり、小矢部川を挟んで両岸に対置する。両村が同じ戸長役場に属していたのは明治12年と16年の2回であるが、両村で1つの戸長役場を持ったという記録はないという³²。またその戸長役場が本遺跡の所在する江尻村（旧村）にあったとも思えない。従ってこの木札の存在やその出土の意味については依然謎が多いが、本調査地の近隣に、戸長役場ないしは戸長に関係した人物・施設がかつて存在した可能性については指摘できよう。とにかくSD223の年代の一端が、明治12~17年にあることは間違いない。従って本調査地の屋敷地の成立は、少なくともこの時期以降のこととなろう。なお上記の所見については、大溝その他屋敷地関連遺構からの出土遺物の様相と大きくは矛盾しないことを、付記しておく。

C 小結

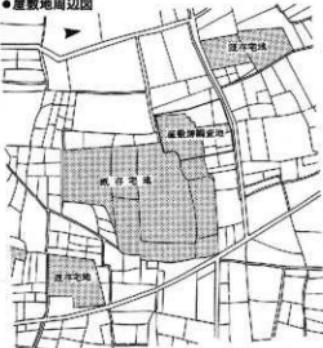
それではいったいどのような建物が、当調査地の屋敷地の中に建っていたのであろうか。このことを考える上で、民俗学の豊富な民家調査の実績とその成果を参照することが前提となる。ただ小論の目的は建物の復元がまず第一であり、民家の研究そのものが目的ではないし、もとより上屋構造が残存しない状況ではそれも不可能であろう。そこで小論ではあくまで建物の復元案の一例を示すにとどめておきたい。

まず予想される民家の型式であるが、民家の研究に詳しい佐伯安一氏によると、富山の民家は「東向き」の南北棟建物が多く、また「単棟集中型」で、あまり機能分化した複数棟の建物構成を取らない点に特徴があるという。屋根型には入母屋（氷見型、富山・射水型、下新川型、八尾山地型）、寄棟（砺波型）、切妻（五箇山型）などがあり、間取り型には山の字型（氷見・五箇山）と広間型（砺波、射水、呉東）に分類できるという⁴³。この内で当該地周辺は砺波平野の北辺にあることから、一応砺波民家を基準に考えてみたい。まず建物の平面プランを考える上では、間取りが重要である。砺波民家は広間型で、オイ（広間）を中心に北側にニワ（土間）、南側にザシキ（座敷）を配置し、東向きの南北棟建物とする。この三室を建物の中核とし、さらに西側にヘヤやチャノマ、ナガシなどを付け加える。またトイレは風向にあたる北東角の庭側に、張り出しが設置される。家の出入りは直接オイの前よりなされる。主屋はオイの規模（2間、2.5間、3間など）によって差があり、さらに増築部分の有無や部屋数などによって建物の規模が大きく異なる。第105図中段左は、砺波民家の間取りの一例である⁴⁴。次いで屋敷地内の各施設の配慮であるが、佐伯氏作成の屋敷地概念図（第105図上段左）によると、中央の東向きの主屋を中心に、季節風の強い南西側に垣根林を植樹し、主屋に東面して前庭（ニヤーバ）を持つ。前庭の一角、屋敷への入り口の横には洗い場となる池（ホッタツ）があり、敷地内の外縁に沿って灰小屋・納屋その他の小規模な付属屋が並ぶ。屋敷地の区画は溝・道路などによってなされるが、溝は単なる区画溝（空堀）ではなく、周辺農地への用水の一部を屋敷の区画溝に取り込む。砺波民家については、以上のようなイメージで捉えることができる。そこでこのような砺波民家の構成要素を念頭に置き、当調査地の屋敷跡の復元を試みる。その際の手がかりとして、建物の基礎の一部と考えたS X224を建物の一角に取り込み、さらにトイレ跡と考えられる桶底土坑S K215を建物の北東角に配置するプランを想定し、これに現存民家の平面プランを重ね合わせてみた。その結果、例えば第105図①の長原氏宅や③の荒木氏宅ではやや小規模であり、④の吉田氏宅ではS K224やS K215の配置はうまく合うものの、規模が大きく建物南側の一部が区画の大溝と重複する。そこで両者の中间を取って、②の佐伯氏宅を本調査地の屋敷建物にイメージした（第105図下段左）。その結果概ねにおいて検出遺構の配置とも整合することが判明した。またB地区で検出した整地土層の広がりも建物の規模と一致することがわかった。但し井戸S E21は建物の外のやや離れた位置にあることになる。建物以外の配置では、方形土坑S K351が、洗い場となる前部の池に相当する位置にあることがわかる。また洗い場は前述のように、大溝の外側にももう一方所あることになる。区画の大溝も西と北が開放されており、用水の一部を取り込んでいることがわかる。屋敷地への出入りは、溝東辺のやや北寄りにおいて一部二段堀り状に浅くなる所があり、この付近に設置されていた可能性が高い。もちろん佐伯氏宅と全く同じ民家がここに建っていたと言うつもりは毛頭ないが、一つの参考にはなろう。なお佐伯邸の敷地面積は3000m²で、本調査地の予想敷地面積の2000m²よりもやや広い。またこの場合の建物の坪数は約60坪で、明治中期の民家の平均坪数の15~20坪よりも大きいが、地主クラスとされる70~80坪よりは小さい。従って仮にこの坪数を一つの目処とした

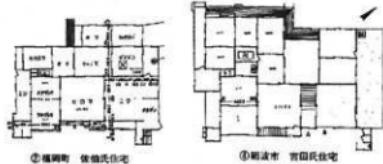
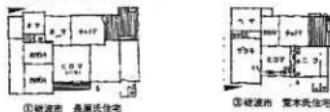
●砺波民家の屋敷地概念図



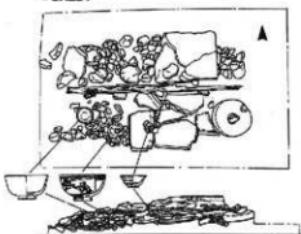
●屋敷地周辺図



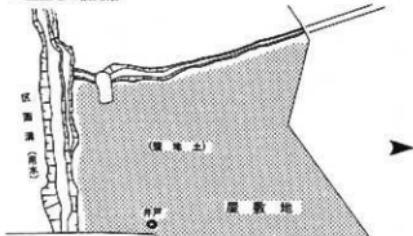
●砺波民家の間取り例



●SX224



●屋敷地の復元案



●「戸長役場」木札



第105図 砺波民家の類例と屋敷地復元案

場合、本屋敷地には上級農民層の居住者が想定されよう。

次に屋敷地の存続年代と周辺環境について言及しておきたい。この点を考える上で昭和20年代のは場整備以前の地図が参考となる（第105図上段右）。まず屋敷地の北辺に沿って東西にのびる旧道が見える。この道はB2地区で検出された道路遺構と重複する位置にあり、同じ道と考えられる。旧道は東側の広い道（現県道）からのびる側道に相当する。また地図には周辺の既存宅地が明示されている。これによると本調査地の屋敷地に相当する宅地は既に無く、この頃には屋敷が廃絶していることがわかる。のことから屋敷地の存続年代を、明治中期から昭和前期にかけての時期幅で捉えておきたい。一方地図では、本調査地の南東側に広大な面積を有する既存宅地のエリアが見える。この敷地は当時3件の宅地に分譲されているが、本来は一つまとまりを有する敷地であった可能性が指摘できる。ここからは全くの推測になるが、ここで地元に残る庄屋屋敷の伝承が注目される。すなわち当地には「かつて大道さんという庄屋さんがおられ、代々屋敷を構えられていたが、昭和の初め頃に代が途絶えられ、屋敷も無くなってしまった」という言い伝えである。また当地には寺小屋があつたという伝承もある。一方明治初期の学制公布により、同7年江尻にも弘裕小学校が創立されるが、その学舎は大道掃部氏の私宅を借りて設置されたという記録が残っている。この大道掃部邸が正確にどこにあったのかはまだ特定できないが、学制に先行する寺小屋教育もまた村役の私邸で行われることがあり、弘裕小学校もまた大道氏の私邸に設置されたのかもしれない。また当調査地出土の木札にみる戸長も庄屋など地元の有力者が任命されることが多く、戸長役場自体も戸長の私邸に設置されることが多かったという点も注目される。従って依然単なる推測の域を全くでないものではあるが、地図にみられる広大な敷地跡についても、かつての庄屋屋敷に連なるような、地元有力者の屋敷地跡に比定できる可能性があろう。但しこの点については今後さらに追跡調査を行う必要がある。また本調査地で検出された屋敷地の居住者についても、依然特定することができない。つまり現段階では、一つの可能性についてのみしか指摘できないのが実情であり、このあたりが考古学的検討の限界を示すものと考えられよう。

なお小文の作成に際して、砺波郷土資料館館長の佐伯安一先生から数々のご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

（森 隆）

注1 「戸長役場」については下記の文献を参照した。

- ①国史大典編纂委員会 1984 「国史大典」 吉川弘文館
- ②横本芳雄・伊藤唯賢 1969 「政治のうつりかわり」『福岡町史』 福岡町役場
- ③石崎真義・石井信男 1971 「明治の夜あけ」『小矢部市史（下巻）』 小矢部市役所

注2 佐伯安一氏のご教示による。

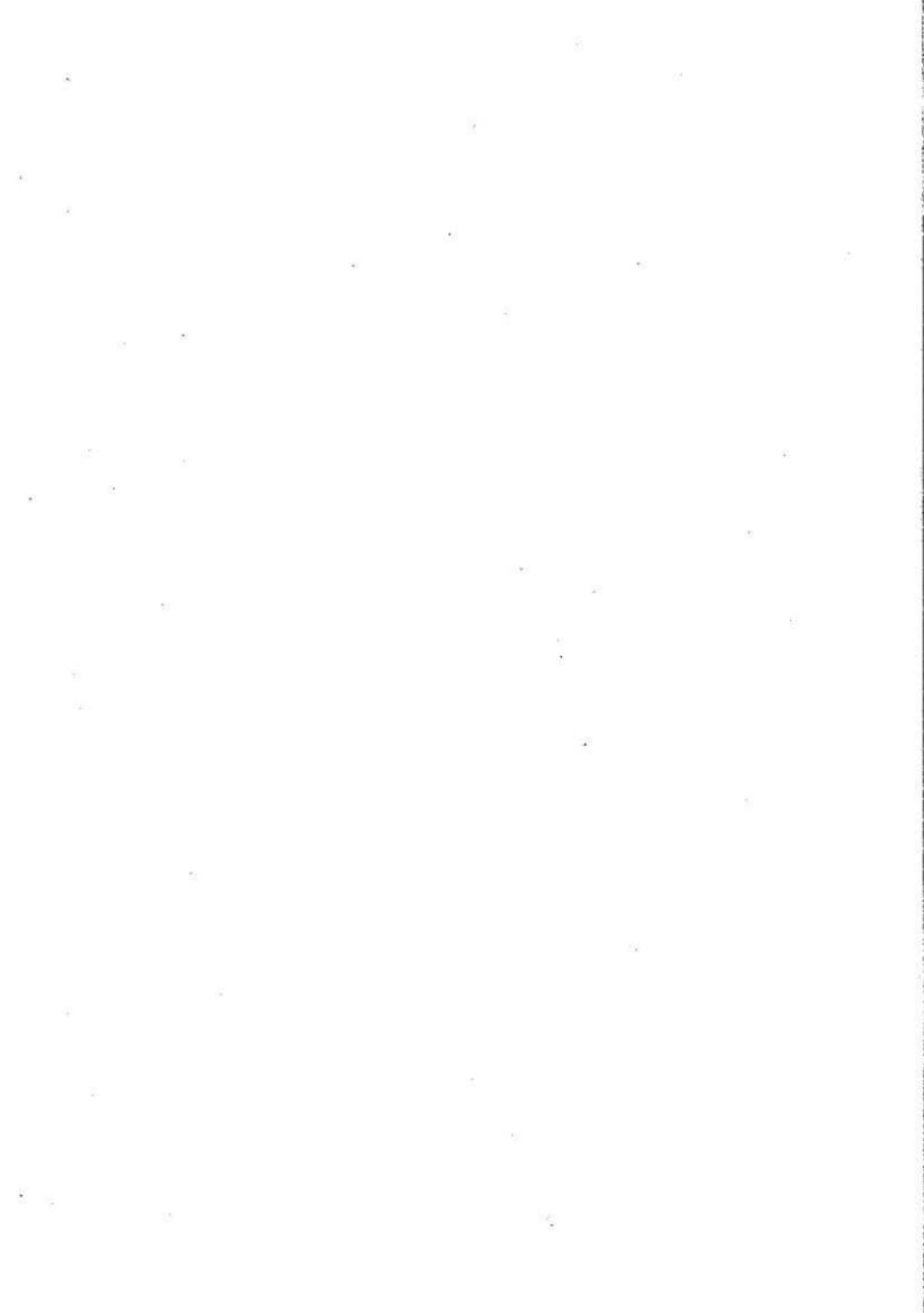
注3 佐伯安一 1973 「衣食住」『富山県史 貧俗編』 富山県
1996 「富山県の民家」『平成7年度埋蔵文化財発掘調査専門職員等研修会資料』

注4 富山県教育委員会 1970 「富山県の民家（民家緊急調査報告書総編）】

注5 佐伯安一氏のご教示による。

注6 高広英吉 1969 「教育の向上」（前掲注1②文献所収）

自然科学的分析



I 樹種鑑定報告書

財團法人 元興寺文化財研究所

1. 樹種鑑定の概要

樹種の分類は、花、果実、葉など種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は樹種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する樹種を除き、同定できない場合がある。樹種の同定が困難な場合は、科・亜科・族・亜族・属・亜属・節・亜節（分類の大きい順）のいずれかで表す。

*科・亜科・族・亜族・属・亜属・節・亜節・種の分類は、主に原色日本植物図鑑（保育社）による。

2. 切片作製

カミソリの刃で遺物をできるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の3方向の切片を正確に作製する。

3. 永久プレパラート作製

切片はサフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（EUKITT）を用いて永久プレパラートを作製する。

4. 同定方法

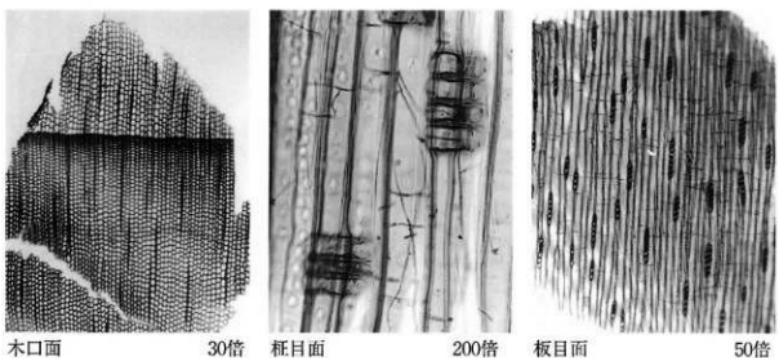
針葉樹については、早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し、同定する。

5. 顕微鏡写真撮影

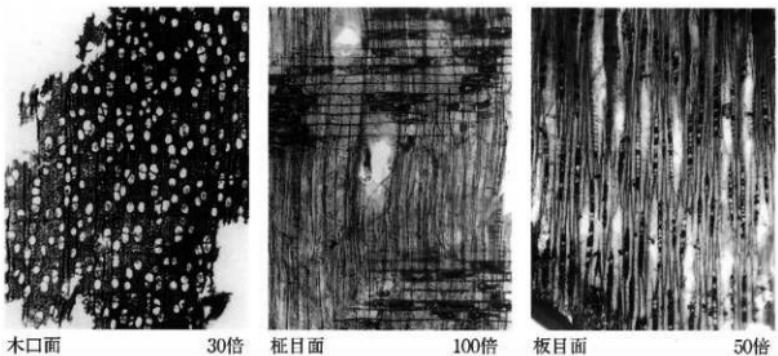
木口面は30倍、柾目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍、板目面は50倍で撮影する。

江戸遺跡 木製品樹種

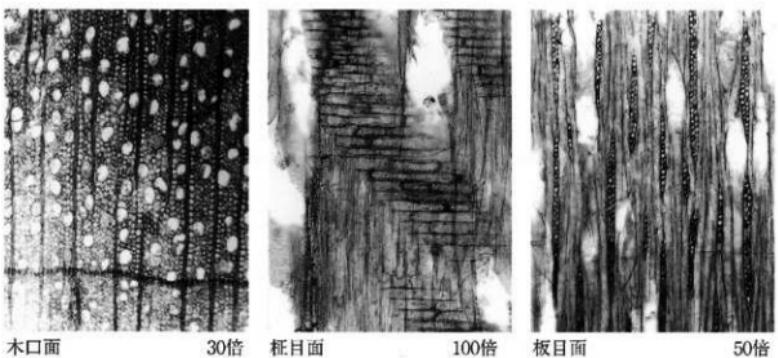
保存処理番号	遺物番号	種類	材質	備考
1	610	座器板状	ヒノキ科	ヒノキ科に属する樹種 ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ等
2	620	椎	ヒノキ科	ヒノキ科に属する樹種 ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ等
3	614	座器輪	トチノキ	
4	613	座器輪	トチノキ	
5	602	下駄(本体)	ホオノキ	
6	601	下駄(両)	ホオノキ	
		下駄(本体)	ホオノキ	
7	616	檜蓋(栓)	スギ	
		檜蓋(本体)	スギ	
8	617	椎盤	スギ	
9	634	木臼	ブナ	
10	630	柱	シオジ	
11	621	柱	タリ	
12	625	柱	タリ	
13	627	柱	コナラ筋	コナラ筋に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
14	628	柱	タリ	
15	629	柱	タリ	
16	631	橋	スギ	
17	632	木臼	ブナ	
18	633	木臼	ブナ	
19	634	下駄	ホオノキ	
20	648	匙	ブナ	
21	677	折敷	ヒノキ	
22	671	柱	モクセイ科	モクセイ科に属する樹種 シオジ、ヤチダモ、コバノトネリコ等
23	681	柱	ヤマウルシ?	
24	686	柱	タリ	
25	684	柱	タリ	
26	684	柱	タリ	
27	683	柱	コナラ筋	コナラ筋に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
28	685	柱	タリ	
29	687	柱	広葉樹環孔材(ツヅキ?)	
30	682	柱	タリ	
31	670	軸	スギ	
32	662	加工版	ヒノキ科	ヒノキ科に属する樹種 ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ等
33	637	座器輪	ブナ	
34	642	筒状容器	エゴノキ	
35	641	座器蓋	ケヤキ	
36	640	座器蓋	ブナ	
37	645	木札	スギ	
38	680	木臼	ブナ	
39	635	下駄	スギ	
40	714	鏡	コナラ筋	コナラ筋に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
41	712	都材	スギ	
42	713	松形	スギ	
43	710	柄錐彫形	ヒノキ	
44	702	座器輪	ブナ	
45	699	座器輪	ブナ	
46	706	下駄	スギ	
47	701	座器輪	ブナ	
48	700	座器輪	ブナ	
49	703	座器しゃもじ	ホオノキ	
50	709	加工棒	スギ	
51	698	柱	コナラ筋	コナラ筋に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等



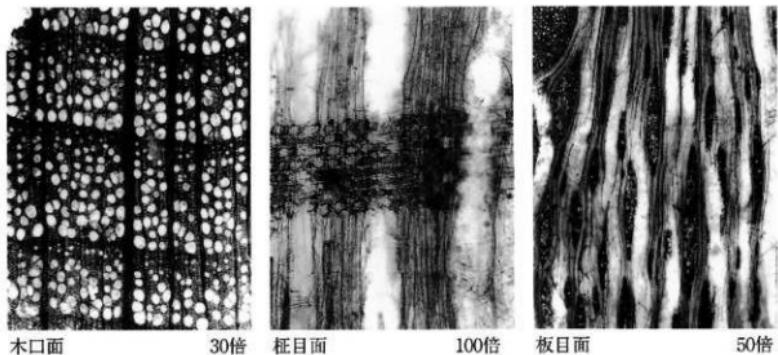
2. 桶 (620) ヒノキ科



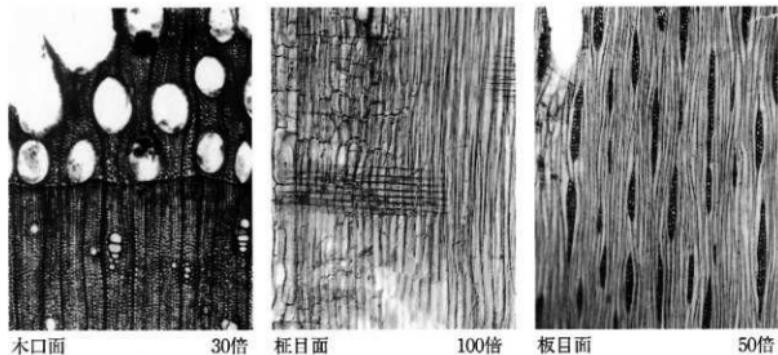
3. 漆器椀 (614) トチノキ



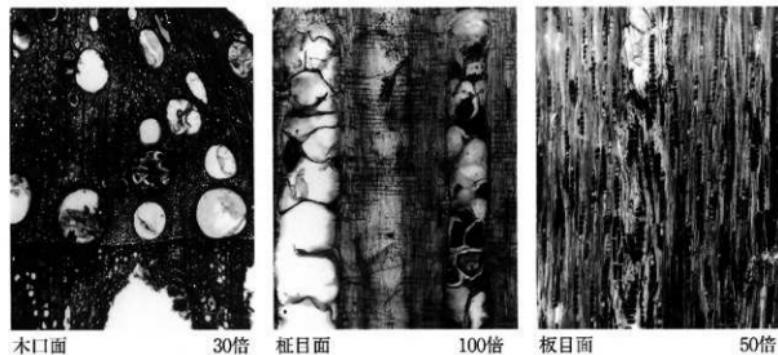
5. 下駄 (602) ホオノキ



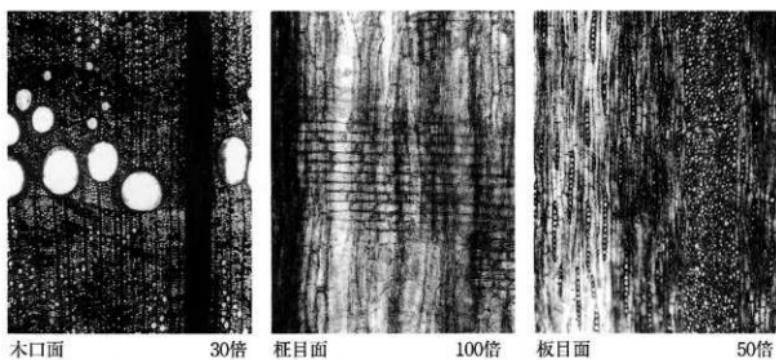
9. 木臼 (634) ブナ



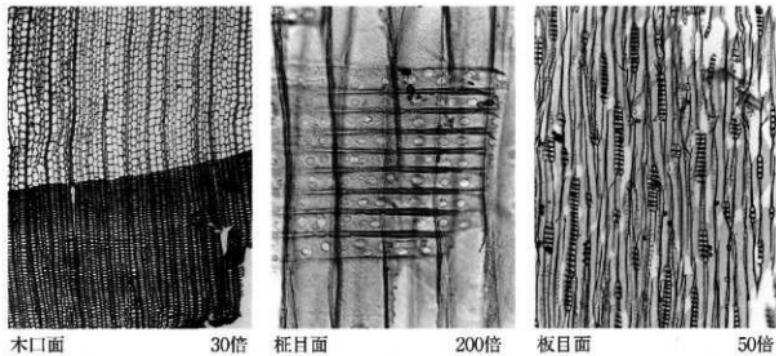
10. 柱 (630) シオジ



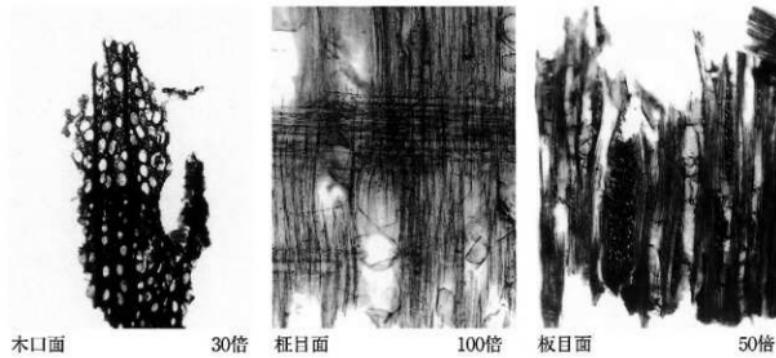
12. 柱 (625) クリ



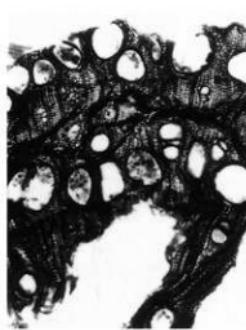
13. 柱 (627) コナラ節



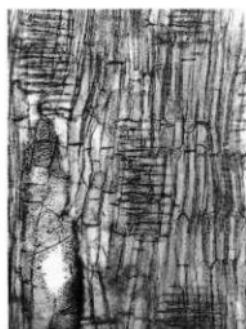
16. 桶 (624) スギ



20. 匙 (648) ブナ



木口面



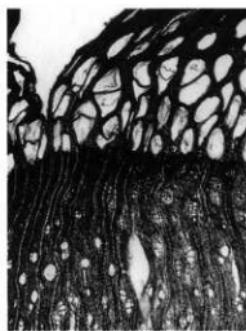
柾目面



板目面

50倍

22. 柱 (671) モクセイ科



木口面



柾目面



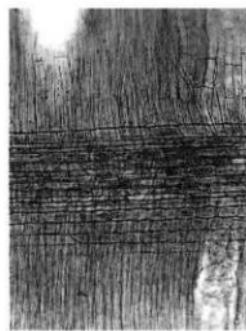
板目面

50倍

23. 柱 (681) ヤマウルシ ?



木口面



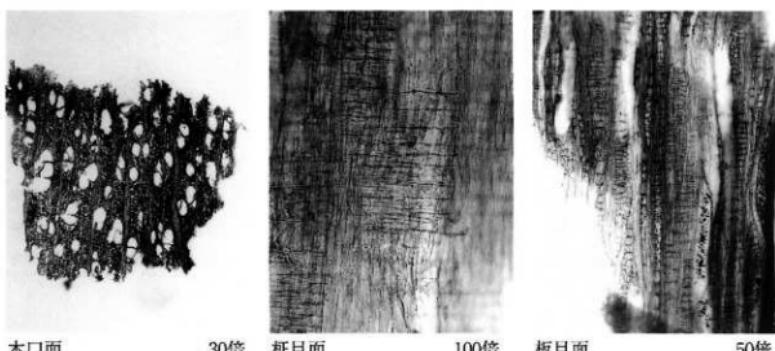
柾目面



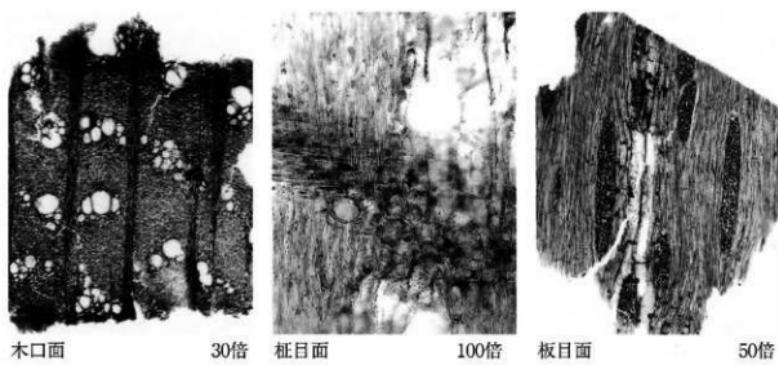
板目面

50倍

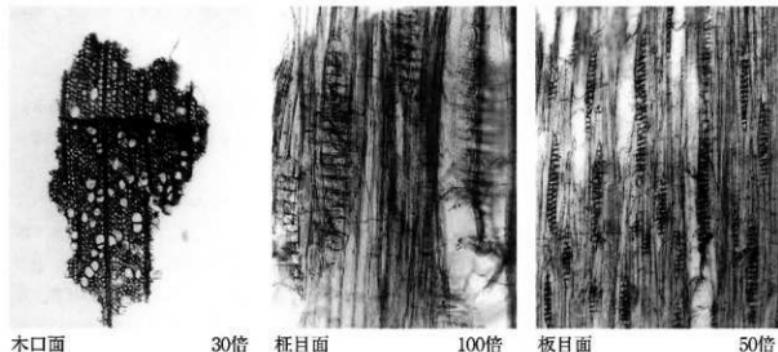
29. 柱 (687) 広葉樹環孔材 (フジキ?)



34. 筒状容器 (642) エゴノキ



35. 漆器蓋 (641) ケヤキ



49. 漆器しゃもじ (703) ホオノキ

II 江尻遺跡出土種子の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

江尻遺跡（富山県福岡町所在）は、射水平野の沖積地に立地する遺跡である。近世～近代の遺構・遺物を中心に検出されているが、伝承によれば遺跡周辺には屋敷跡があったとされ、検出された遺構は近世の豪農またはそれに類する人の屋敷や付属施設に関連したものであると考えられている。今回の調査は、本遺跡から検出された種実等の種類を明らかにし、当時の植物利用、植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、各遺構から出土した種実遺体単体試料（分析番号1～18）計18点である。各試料の詳細は、結果・考察とともに表1に記す。

2. 分析方法

1試料中には、複数の種類・部位が混在するものがみられた（分析番号1～4）。そこで、これらを双眼立体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴と当社所有の現生標本との比較から種類を同定した。同定した種実遺体等は、種類毎に共にピン詰めをおこない、試料の状態によって、乾燥保存（乾燥剤を入れる）あるいはホウ酸・ホウ砂溶液による液浸保存とした。

3. 結果

種実遺体同定結果を表1に示す。木本5種類、草本7種類の種実、葉のほか、木の芽、不明植物（部位・種類ともに不明である植物片）、昆虫の細片などが検出された。検出された種類をみると、木本は、針葉樹2種類（スギ、アスナロ）、落葉広葉樹3種類（オニグルミ、モモ、エゴノキ属）で、常緑広葉樹を含まない。草本は、単子葉類2種類（イネ、エノコログサ属）と、双子葉類5種類（エノキグサ、ナス科、スズメウリ、メロン類、トウガン）が同定された。栽培植物は、モモ、イネ、メロン類、トウガンである。以下に同定された種実遺体の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。人為的干渉の可能性があるものは、破片、炭化の有無を記した。

<木本>

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.) スギ科スギ属

種子が検出された。黒褐色、線状長楕円形でやや偏平。長さ4mm、幅2mm、厚さ1mm程度。両縁に翼があり、正中線上に鈍稜がある。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

葉が検出された。灰褐色、径5mm程度。鱗片状で十字対生して茎を包み、上面下面の別がある。側部は半卵形で内曲する。面部は倒卵形で、中肋に凹みがある。下面是中肋と縁の間は気孔溝となって白色。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

未炭化の核が、完形、半分の状態で検出された。淡灰褐色、広卵形で、先端部分がやや尖る。長さ23.5～30mm、幅21.5～24mm、厚さ24.5mm程度。1本の明瞭な縫合線があり、半分の状態で検出された個体（分析番号9,10,15）は、全て縫合線に沿って半分に割れている。表面には縫合方向に溝状

表1 種実同定結果

分析番号	種類名	部位	本						本						水の芽 不育植物	出因	
			モモ	エゴノキ属	イネ	エノコログサ属	ナス科	スズカク	モモ	エゴノキ属	イネ	エノコログサ属	ナス科	スズカク			
			種子	果皮	核	核	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子		
遺構	出土地点		完形	半分	半分	破片											
1 SE102			3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	斑斑	
2 SP102			-	紙	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2 例例	
3 SE102			1	紙	-	-	-	-	3 多	1	1	-	-	-	-	一	
4 SE102			4	紙	-	-	-	-	26	1	-	1	5	4	1	-	
5 SK361	X72YM07		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
6 (B1)	X71YM98		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
7 (B2)	X88YM14		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8 SD514	X93YM19		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9 SD291			-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
10 SL292			-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
11 SF538	X77YM09		-	-	-	-	1+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
12 SP274	X73YM15		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
13 SD223	X79YM13-14		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
14 SK372			-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
15 SD291	X75YM12		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
16 SK509	X92YM15		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
17 SD291			-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18 SK251	X71-72YM-98下層		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

注) 種子体積測定が困難である被片

注) 数字: 数字以上の個体数が検定される

注) 多: 100個体以上

の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には隔壁と子葉が入る2つの大きな窪みがある。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) パラ科サクラ属

未炭化で完形の核(内果皮)が、完形、半分、破片の状態で検出された。灰褐色、広楕円形でやや偏平。基部は丸く大きな臍点があり、先端部はやや尖る。長さ23.5~31mm、幅16~21mm、厚さ11~16mm程度。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、半分の状態で検出された個体(分析番号7.8)は、縫合線に沿って半分に割れている。内果皮は厚く硬く、表面は継に流れる不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が腐食した個体もみられる(分析番号16)。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子が検出された。灰褐色、卵形で長さ11mm、幅6.5mm程度。基部は切形で淡褐色の大きな臍点がある。表面には3本程度の縱溝が走る。種皮は厚く(1mm程度)硬く、外側は微細な網目模様があり、内側はスポンジ状でざらつく。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

未炭化の穎が検出された。淡褐色で厚く柔らかく、長さ6.5mm程度。特徴的な基部の果実序柄があり、穎表面は規則的に縦列する特徴的な顆粒状突起をもつ。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

未炭化の穎が検出された。淡褐色、半偏球形で大きさ3mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力があり、表面には横方向に長い細胞が密に配列する。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒色、卵形で長さ1.5mm、径1mm程度。先端部はやや尖り鈎状に曲がる。頂部にはY字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かな粒状の隆起が配列しがらつく。

・ナス科 (*Solanaceae*)

多量の種子が検出された(分析番号3)。淡褐色、重な腎臓形で偏平。径3.5mm程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に溝があり、表面は溝を中心として同心円状に星型状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・ズズメウリ (*Melothria japonica* (Thunb.) Maxim.) ウリ科ズズメウリ属

種子が検出された。倒卵形で偏平。長さ5.5mm、幅3.5mm程度。縁は肥厚せず、両面中央には倒卵形の浅い凹みがある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡褐色、狭倒卵形で偏平。長さ6.5~8mm、幅3.5mm程度。基部に「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。藤下(1984)の基準によると、本遺跡出土のメロン類はそのほとんどがマクワ・シロウリ型の中粒種子(長さ6.1~8.0mm)である。

・トウガン (*Benincasa hispida* (Thunb. ex Murray) Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が検出された。灰褐色、倒卵形で偏平。長さ12.5mm、幅6.5mm、厚さ1mm程度。上端に明瞭な溝がある。種子の背腹両面の全周に縁がある。縁には段差があり、薄くなっている。種皮は厚くやや堅い。

4. 考察

今回検出された種実遺体から、当時の植物利用の一端が判明した。有用植物の中では、モモ、イネ、ナス科の一部、メロン類、トウガンは、大陸から渡来した栽培種とされている。これらは、当時の生活残渣が破棄されたもの的一部と考えられ、周辺での栽培、利用が示唆される。利用方法をみると、モモが食用のほか、観賞用、薬用等に広く利用されている。穀類のイネ、ナス科の一部、メロン類、トウガンは種実が食用に利用可能である。また、自生する植物では、堅果類のオニグルミは、食用・長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護、採取されてきた種類である。

砺波平野の散居村では防風林としての屋敷林が発達するが、種類構成は大部分がスギで他にアスナロ、ケヤキ、カシ類、タケ類などがあるといわれている(宮脇編著、1985など)。検出されたスギやアスナロは木材が有用材として利用されるほか、成長が早いことから防風林としても好適であるため、当時屋敷に植栽されていたと考えられる。

同定結果から、自生する種類組成に着目すると、種類数、個体数ともに少ない。検出される種類は、いわゆる「人里植物」であるエノコログサ属、エノキグサや、ズズメウリなどが検出されており、屋敷地あるいは周辺の耕地に生育していたと考えられる。また、エゴノキ属やオニグルミは周辺に自生していたと思われるが、屋敷林の一部をなしていた可能性もある。

今後は、木材、炭化材などの植物遺体、花粉化石、植物珪酸体などの化石類の調査を行うことにより、当時の植物利用と周辺植生についてさらに詳細に検討することができると考えられる。

引用文献

藤下典之(1984)出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法、「古文化財の自然科学的研究」、古文化財編集委員会編、p.638-654、同前書。

宮脇 昭編著(1985)日本植生誌 中部、604p., 王文堂。

図版1 植実遺体



1. オニグルミ 核 (SD291; 分析番号17)
 3. モモ 核 (SK361; 分析番号5)
 5. モモ 核 (SD514; 分析番号8)
 7. トウガン 種子 (SE102; 分析番号4)
 9. イネ 頬 (SE102; 分析番号4)
 11. メロン類 種子 (SE102; 分析番号4)
 13. ナス科 種子 (SE102; 分析番号3)
 15. エノキグサ 種子 (SE102; 分析番号3)
2. オニグルミ 核 (SD291; 分析番号15)
 4. モモ 核 (B1; 分析番号6)
 6. エゴノキ属 種子 (SP274; 分析番号12)
 8. アスナロ 葉 (SE102; 分析番号2)
 10. スズメウリ 種子 (SE102; 分析番号4)
 12. スギ 種子 (SE102; 分析番号1)
 14. エノコログサ属 頬 (SE102; 分析番号2)

図 版



江尻遺跡

全景（南西から）

図版2



江戸遺跡 A~C地区（縄文時代）

1. A~B地区 縄文谷 SD131(西から) 2. A~C地区 縄文谷 SD131(南西から)



江尻遺跡 B地区（弥生時代）

1. B1地区 遺構全景(北から) 2. B2地区 遺構全景(南東から)

図版4



江尻遺跡 B・C地区（縄文・弥生時代）

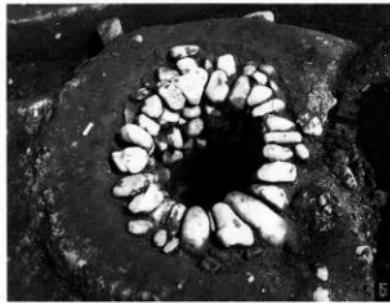
1. B1地区 SD477 遺物出土状況(西から)
2. C地区 全景(北から)
3. C地区 SD605 水利施設検出状況(北東から)
4. C地区 SD605 遺物出土状況(東から)



江戸遺跡 A 地区（近世）

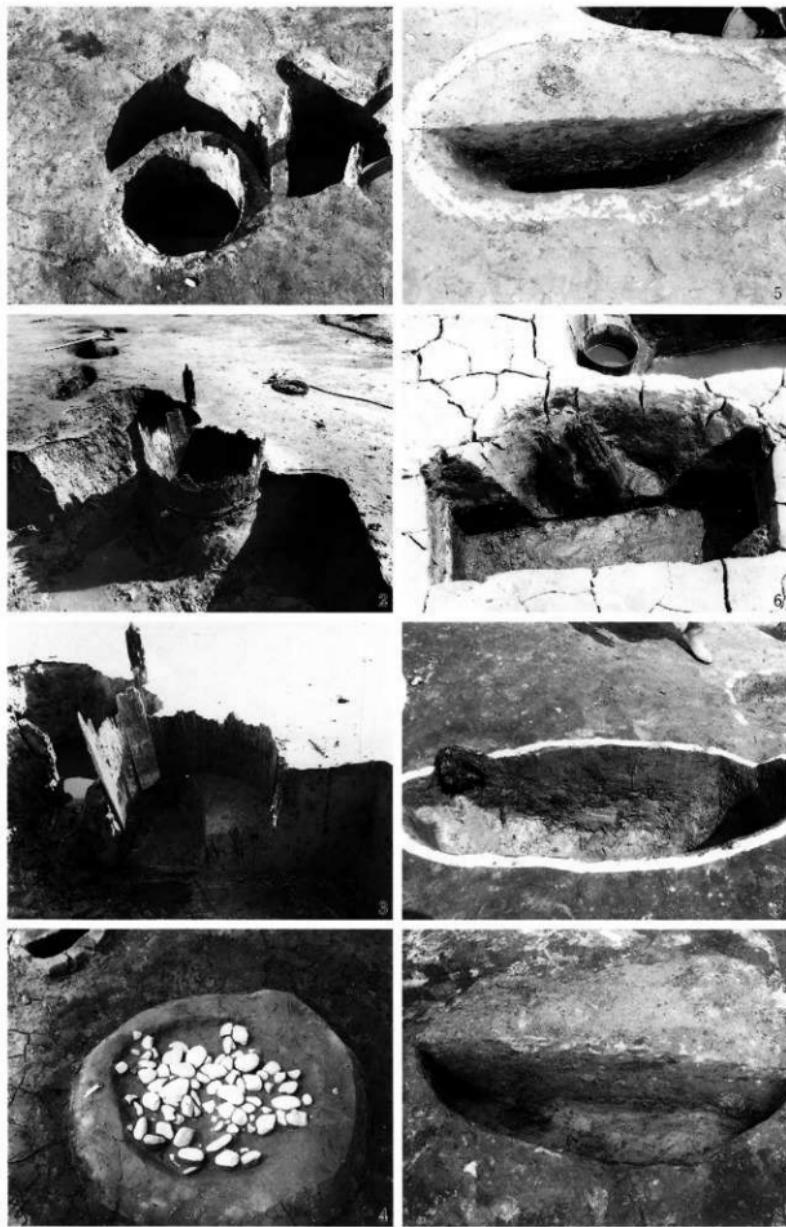
1. 全景(北から) 2. SB1・SB2(北から)

図版 6



江尻遺跡 A地区 井戸・土坑(近世)

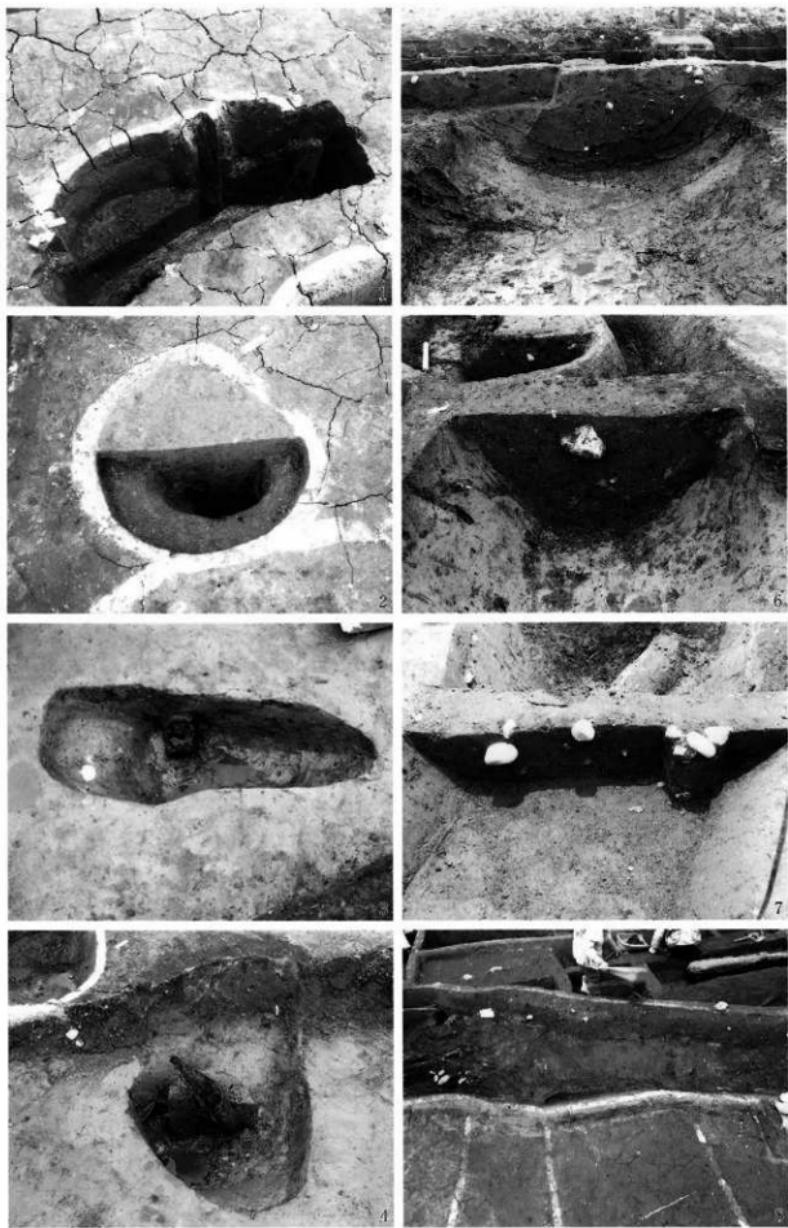
1・2. SE30(北から) 3・4. SE102(南から) 5. SE21(南から) 6・7. SE21(西から) 8. SK18(東から)



江戸遺跡 A地区 土坑(近世)

1. SK142(南から) 2・3. SK142(西から) 4. SK48(南から) 5・6. SK40(西から) 7. SK63(南から)
8. SK69(西から)

図版 8



江戸遺跡 A地区 柱穴・溝(近世)

1. SP29(西から) 2. SP61(南から) 3. SPI26(南から) 4. SPI28(南から) 5. SD1・SD2(西から)
6. SD3(南から) 7. SD4(北から) 8. SD4(東から)



江戸遺跡 B 地区（近世）

1. 全景(北東から) 2. 全景(南東から)

図版10



江戸遺跡 B1 地区（近世）

1. 全景(西から) 2. 西半部全景(北から)



江戸跡 B1 地区（近世）

1. 全景(南西から) 2. 全景(南東から)

図版12



江戸遺跡 B1地区 建物(近世)

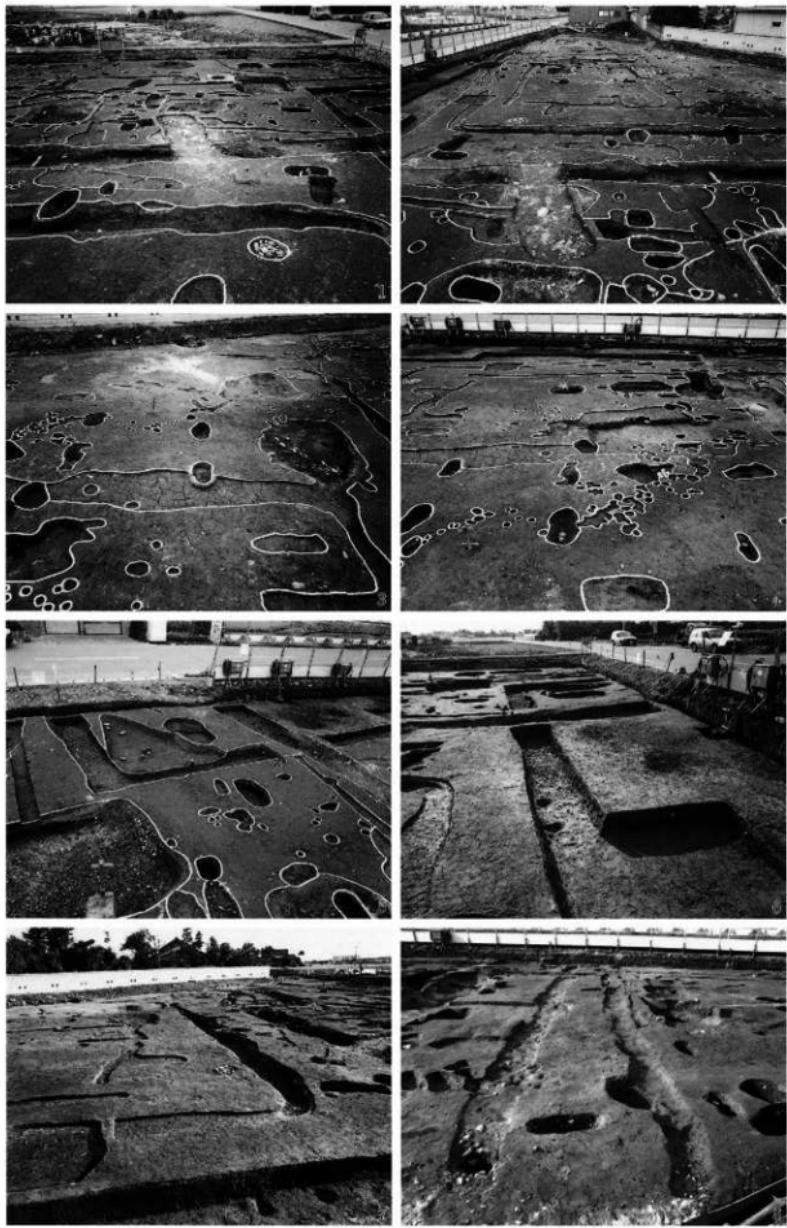
1. 中央・東側建物群(北西から) 2. 西側建物群(北から)



江尻遺跡 B1地区 建物(近世)

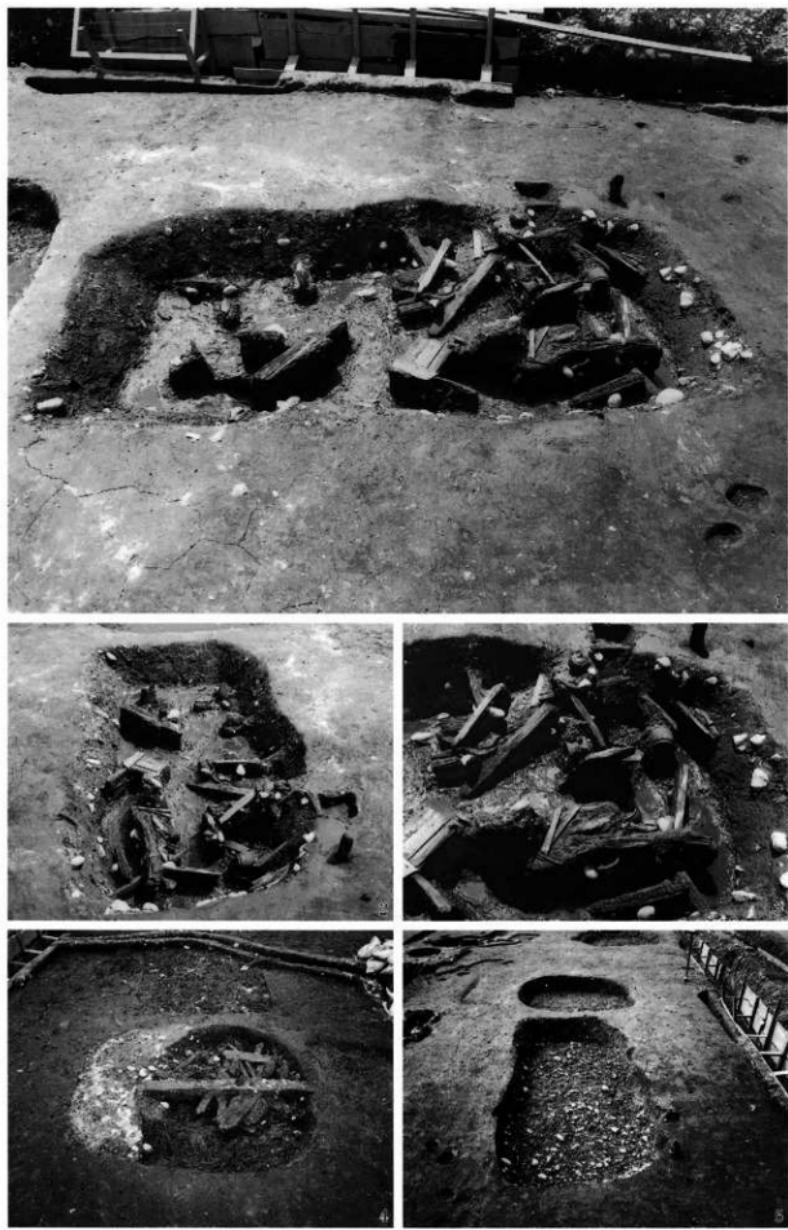
1. 中央建物群(北西から) 2. 東側建物群(北から)

図版14



江尻遺跡 B1 地区 建物・土坑・溝(近世)

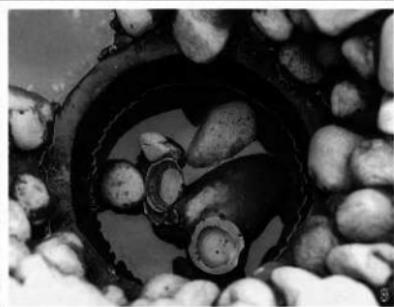
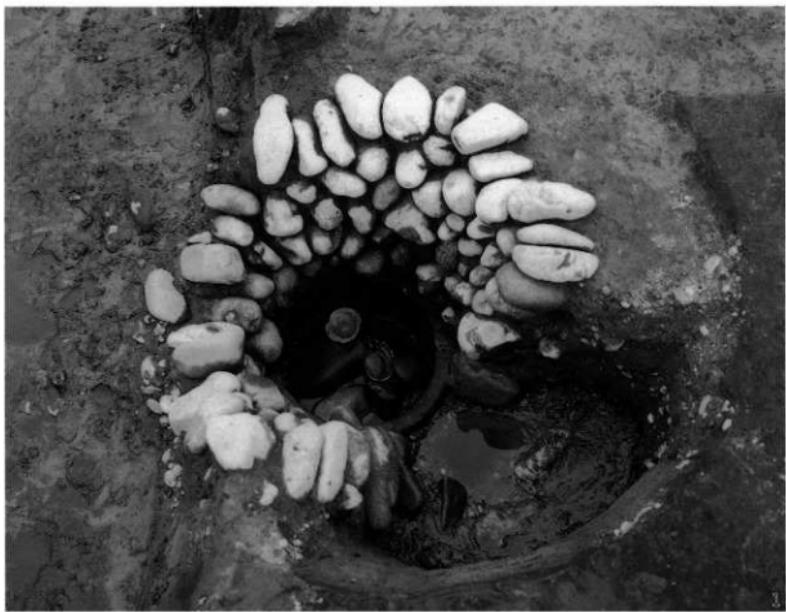
1. SB14・SB15付近(東から)
2. SB12・SB13付近(西から)
3. SB13(北から)
4. SB12(南から)
5. SD223・SK230付近(南西から)
6. SD223(東から)
7. SD298(北から)
8. SD291・SD294(南から)



江戸遺跡 B1地区 土坑(近世)

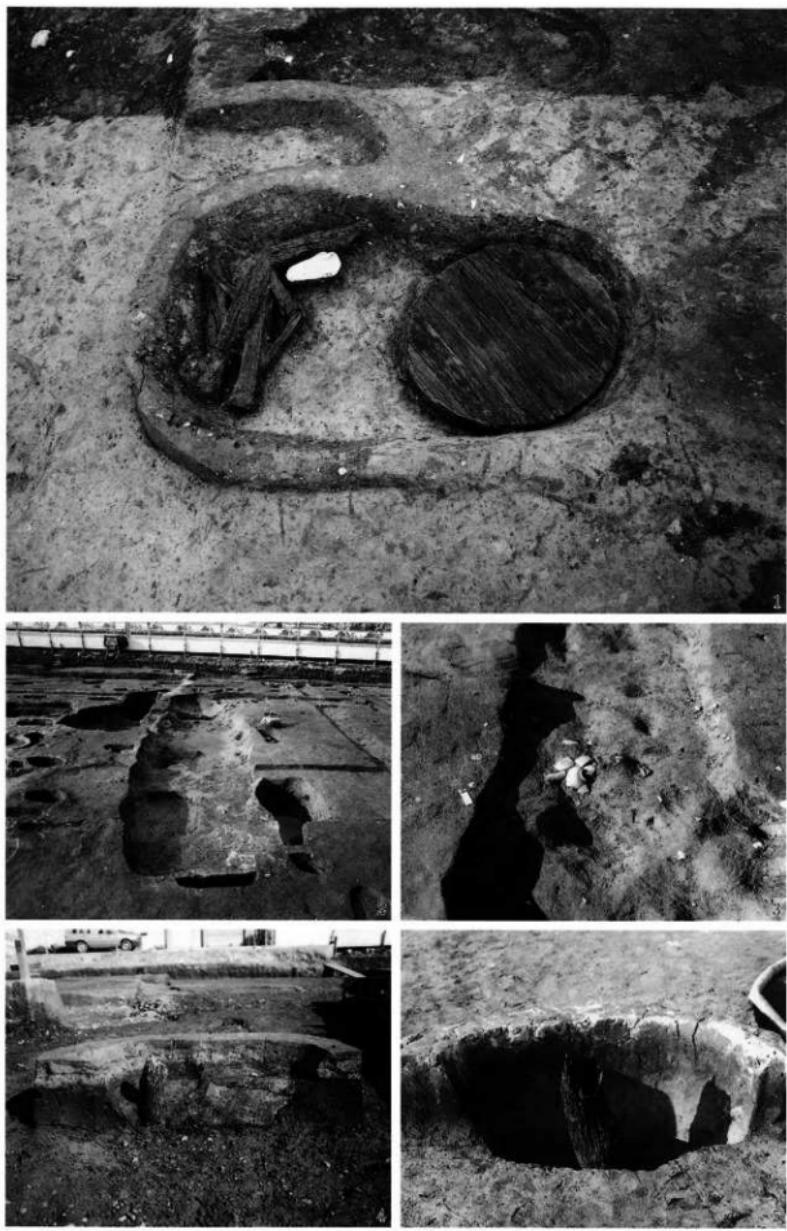
1. SK235(東から)
2. SK235(北から)
3. SK235 遺物出土状況(東から)
4. SK281 遺物出土状況(南から)
5. SK235・SK281 完掘状況(北から)

図版16



江尻遺跡 B1 地区 井戸・土坑(近世)

1. SE456(西から)
2. SE456 遺物出土状況(北西から)
3. SE456 遺物出土状況(南から)
4. SE456 断面(西から)
5. SK259(北から)



江尻遺跡 B1地区 柱穴・土坑・溝(近世)

1. SK269 遺物出土状況(西から)
2. SK262(南から)
3. SD291 遺物出土状況(南から)
4. SP301 柱出土状況(南から)
5. SP344 柱出土状況(南から)

図版18



江戸遺跡 B1 地区 柱穴・土坑(近世)

1. SK367 石出土状況(北東から)
2. SK395 柱出土状況(南から)
3. SP417(東から)
4. SP419 柱出土状況(北から)
5. SK426 柱出土状況(東から)
6. SP433 石出土状況(南西から)
7. SP427 上層出土状況(東から)
8. SP427 柱出土状況(東から)



江戸遺跡 B1地区（近代）

1. 屋敷地全景(東から) 2. 屋敷地全景(北から)